

# 高エネルギーハドロン衝突の QCD物理

2017年 12月 5-7日

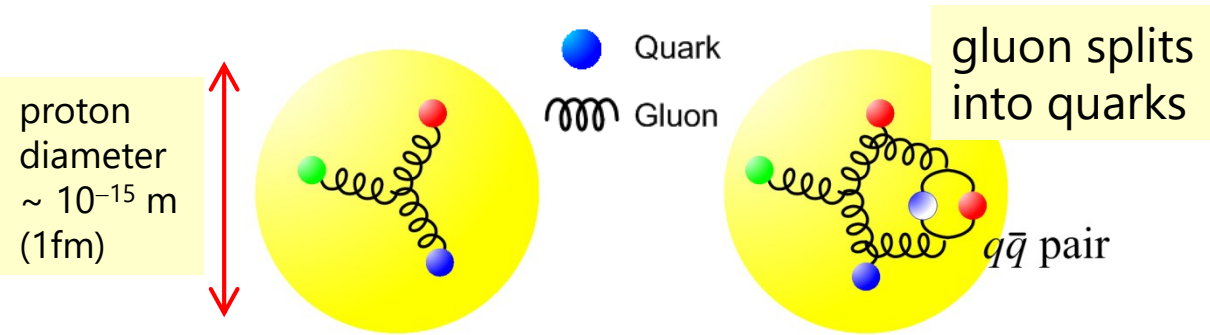
神戸大学 山崎祐司

[yamazaki@phys.sci.kobe-u.ac.jp](mailto:yamazaki@phys.sci.kobe-u.ac.jp)

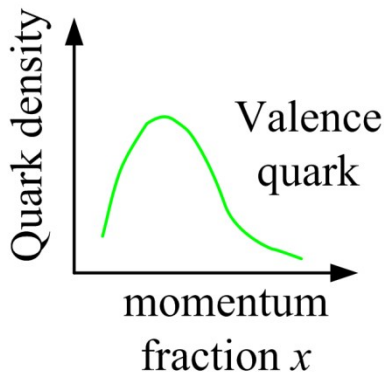
# 講義の内容

1. ハドロン散乱の基礎過程  
ソフトな散乱とハードな散乱, 様々なプロセス
2. パarton密度  
フォーマリズム, 電子・陽子散乱による測定, 解釈
3. ハードな散乱と摂動論的QCD  
ジェットと破砕化, 高次の摂動計算入門,  $\alpha_s$  測定
4. 談話会: 「LHC 陽子散乱の理解と QCD:  
トッブクオーク, 新物理探索を例にとって」
5. ソフトな散乱 (+3. の続き)  
全断面積, 回折散乱, 多重parton散乱
6. 回折散乱の摂動論的理解  
回折散乱の実験・解析手法, 前方粒子生成

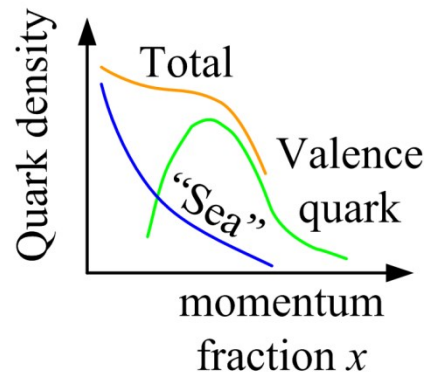
# 固定標的実験での陽子構造測定



- $Q^2$  が大きくなると波長が短くなる
  - 細かい内部構造が見えてくる
  - グルーオンがクォーク・反クォーク対に分解してできる「Sea (海) クォーク」



early fixed target exp'ts  
 $Q \sim 1-3 \text{ GeV} (10^{-1} \text{ fm})$

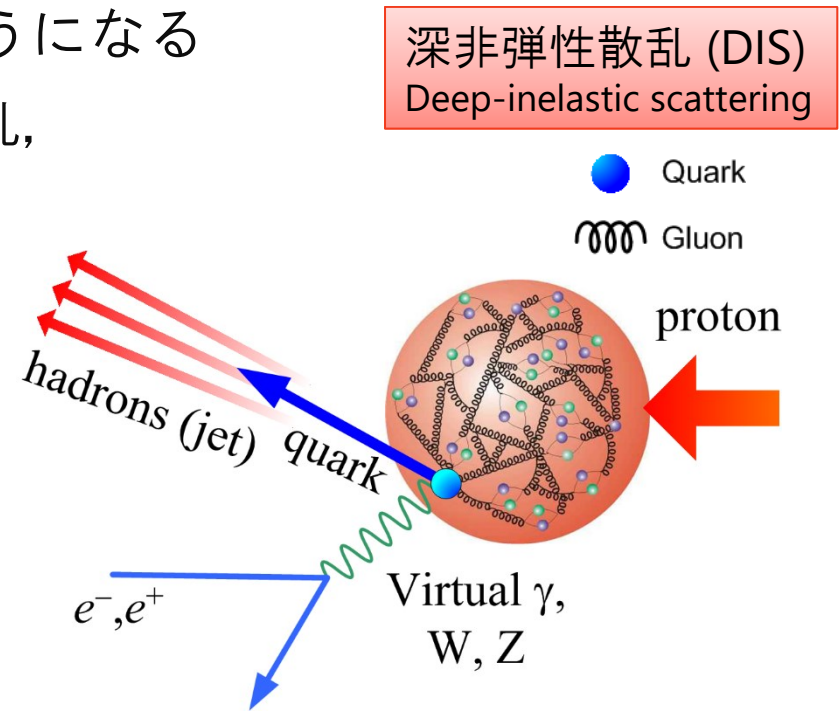


recent fixed target + muon  
 $Q \sim 1-10 \text{ GeV} (10^{-2} \text{ fm})$

Increasing resolution (large  $Q^2$ )  $\rightarrow$   $Q^2 \approx \frac{1}{\lambda^2}$

# クォークが「見える」条件

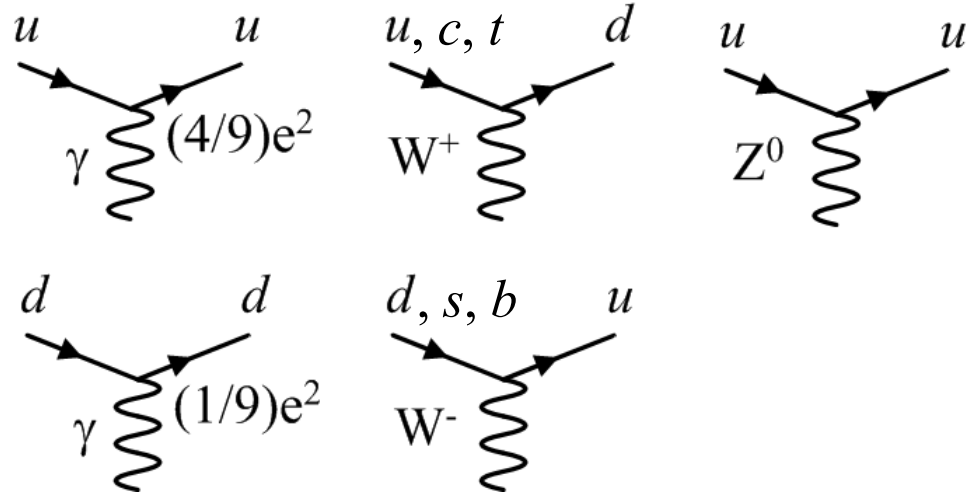
- 閉じ込めにより，クォークは外には出てこないが「見る」ことはできる
- 高いエネルギーの散乱（短い波長）で見れば， $\alpha_s$  が小さくなって，見えるようになる
  - 電子・陽子散乱（深非弾性散乱，deep inelastic scattering, DIS）
  - ハドロン同士のパートン散乱：いわゆる「ハード」な散乱  
横運動量が多い



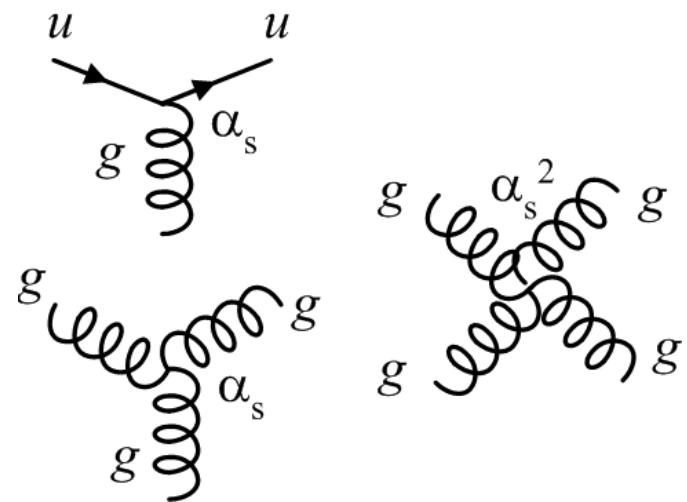
点状粒子（電子）で直接クォークをたたく

# クォークとグルーオン

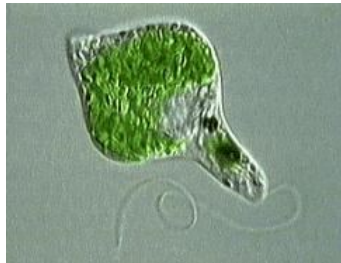
- クォークと電磁気 ( $\gamma$ )
  - u-type ( $e_u^2 = 4/9$ )
  - d-type ( $e_d^2 = 1/9$ )
- $W^\pm$ : u, d 同じ電荷
- $Z^0$  は複雑



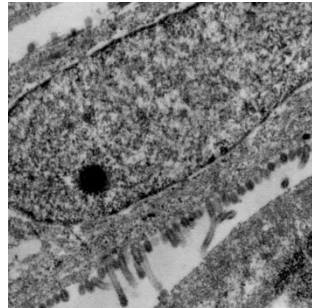
- グルーオン
  - クォーク間の相互作用
  - 電弱相互作用との違い：
    - 結合定数がむちゃくちゃ大きい
    - 自己結合する  
(非可換群の性質,  
弱ゲージボゾンも同じ)



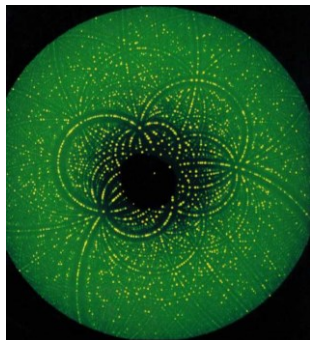
# 陽子の構造, どうやって調べるか



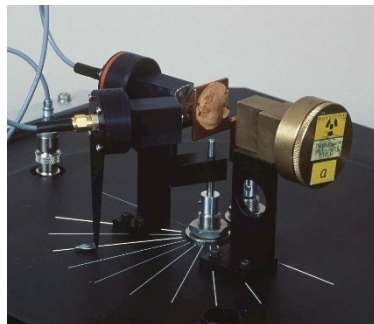
ミドリムシ



鳥インフルエンザウィルス



放射光の回折パターン



Rutherford 散乱の再現  
(Rutherford 研究所)



核子のスピンを固定標的  
電子散乱で探るHERMES実験

光学顕微鏡

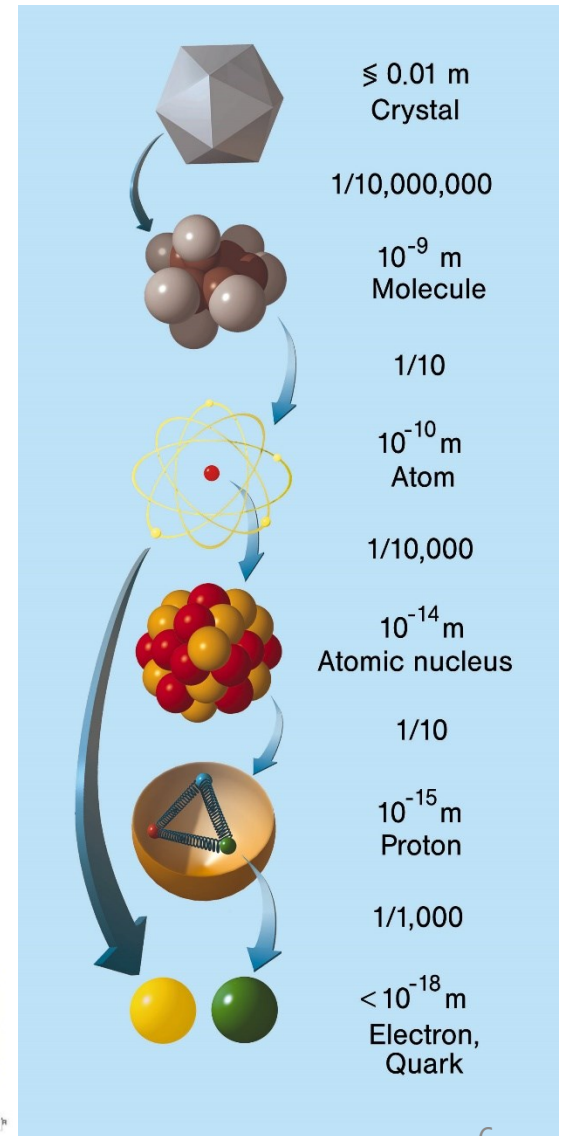
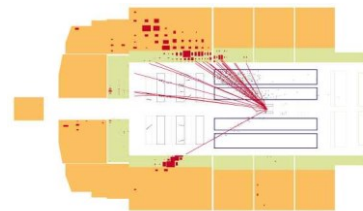
電子顕微鏡

X線発生器  
放射光

$\alpha$ ,  $\beta$  線 (同位体  
元素の崩壊)

電子ビーム  
重イオンビーム

電子・陽子衝突  
散乱 HERA



# 素過程：電子・クォーク散乱

- 計算の方法はフェルミオン同士の散乱（例：電子・電子散乱）などと同じ電荷だけ違う

$$\frac{d\hat{\sigma}}{d\hat{t}} = \frac{1}{16\pi\hat{s}} \cdot 2e_q^2 e^4 \cdot \frac{\hat{s}^2 + \hat{u}^2}{\hat{t}^2}$$

DIS変数の定義

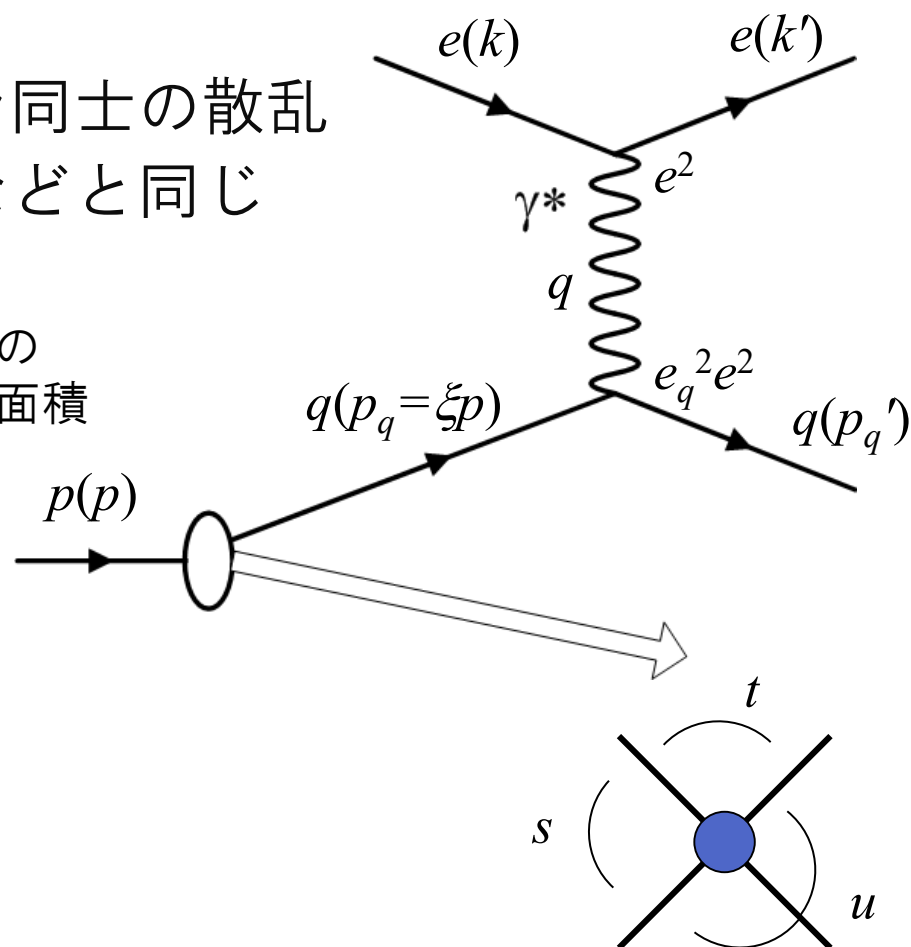
$$s = k \cdot p, \quad Q^2 = -q^2 = -(k - k')^2$$

$$x = \frac{Q^2}{2p \cdot q}, \quad y = \frac{p \cdot q}{p \cdot k}, \quad sxy = Q^2$$

$s$ : 陽子と電子の重心系エネルギー

$Q^2$ : 電子からの運動量移行（仮想光子経由）の自乗の負数 質量は負だが正になるように定義

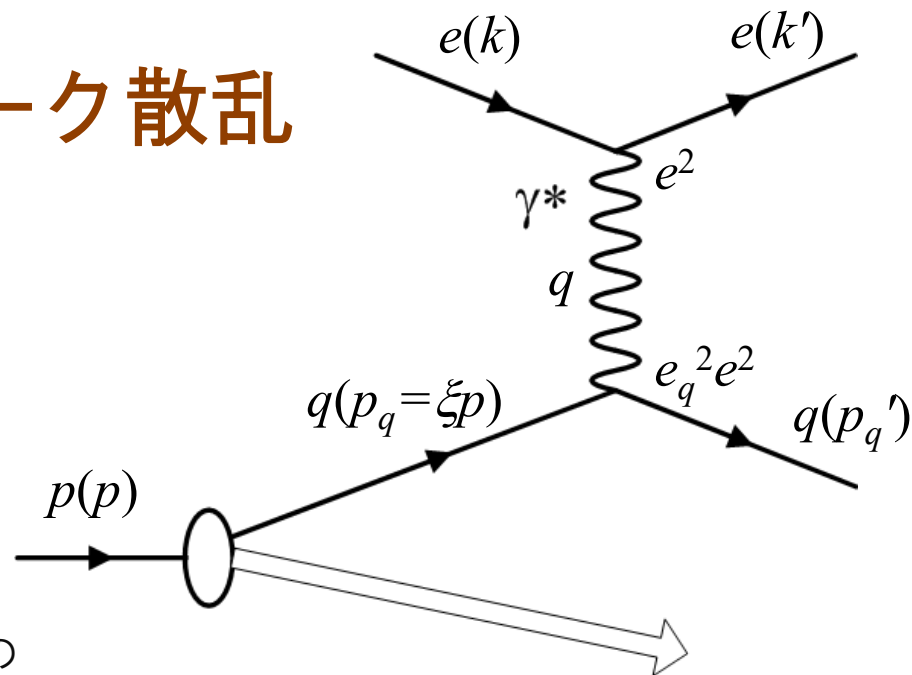
素過程の  
散乱断面積



# 素過程：電子・クォーク散乱

$$s = k \cdot p, \quad Q^2 = -q^2 = -(k - k')^2$$

$$x = \frac{Q^2}{2p \cdot q}, \quad y = \frac{p \cdot q}{p \cdot k}, \quad sxy = Q^2$$



$s$ : 陽子と電子の重心系エネルギー

$Q^2$ : 電子からの運動量移行（仮想光子経由）の自乗の負数 質量は負だが正になるように定義

$y$ : 陽子の方向に射影した電子の運動量に対する仮想光子の運動量の比

$1 - y = 1 - \frac{p \cdot q}{p \cdot k} = \frac{p \cdot k'}{p \cdot k} = \frac{p_q \cdot k'}{p_q \cdot k}$  電子・クォーク重心系の散乱角を  $\theta$  とすると,  $k'(k'_\perp, k'_\parallel, E) = (k' \sin\theta, k' \cos\theta, k')$  より重心系では  $k = k'$  だから,

$$p_q \cdot k' = |p_q| |k| (1 + \cos\theta) = 2p_q \cdot k (1 + \cos\theta) \text{ よって } 1 - y \simeq \frac{1}{2} (1 + \cos\theta)$$

$y = 0$  がかすり散乱,  $y = 1$  で電子が全エネルギーを失う

$x$ : クォークの運動量と関係ある量: 結論から言うと, もし始状態, 終状態のクォークの質量が無視できるなら,  $x$  はクォークの陽子に対する運動量比  $\xi = p_q/p$  と一致

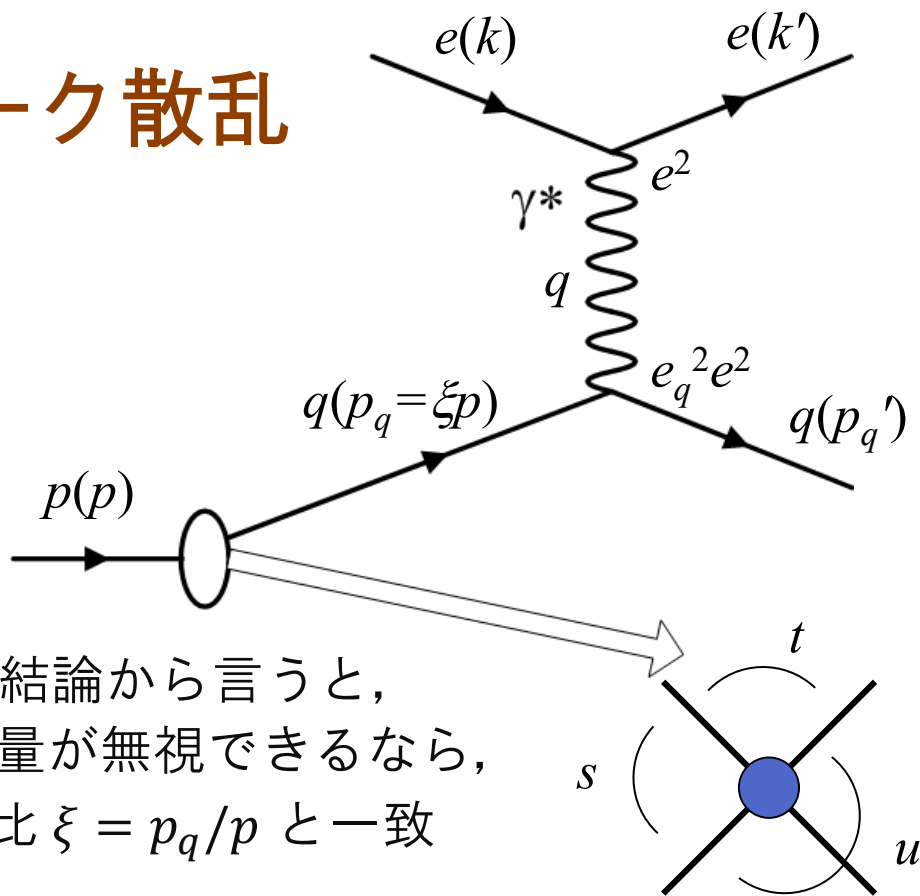


# 素過程：電子・クォーク散乱

DIS変数の定義

$$s = k \cdot p, \quad Q^2 = -q^2 = -(k - k')^2$$

$$x = \frac{Q^2}{2p \cdot q}, \quad y = \frac{p \cdot q}{p \cdot k}, \quad sxy = Q^2$$



$x$ : クォークの運動量と関係ある量：結論から言うと、もし始状態、終状態のクォークの質量が無視できるなら、 $x$  はクォークの陽子に対する運動量比  $\xi = p_q/p$  と一致

$\hat{s} = 2k \cdot p_q = 2\xi k \cdot q = \xi s = \xi \frac{Q^2}{xy}$  だが、 $m_q^2 = p_q^2 = p_q'^2 = 0$  なら、

$$p_q'^2 = (p_q + q)^2 = q^2 + 2p_q \cdot q = -2xp \cdot q + 2\xi p \cdot q = 2p \cdot q(\xi - x) = 0$$

よって、 $x = \xi$ ,  $\hat{s} = \frac{Q^2}{y} = xs$  となり、上の結論が成り立つ

※  $x$  は電子と「当たった」クォークの運動量比

# 素過程：電子・クォーク散乱

- 計算の方法はフェルミオン同士の散乱  
(例：電子・電子散乱) などと同じ  
電荷だけ違う

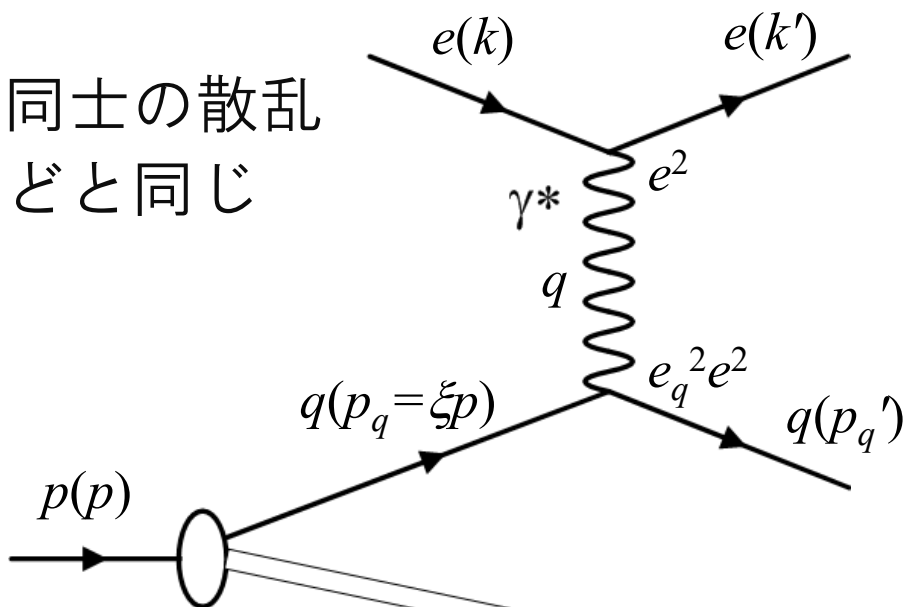
$$\frac{d\hat{\sigma}}{d\hat{t}} = \frac{1}{16\pi\hat{s}} \cdot 2e_q^2 e^4 \cdot \frac{\hat{s}^2 + \hat{u}^2}{\hat{t}^2}$$

DIS変数の定義

$$s = k \cdot p, \quad Q^2 = -q^2 = -(k - k')^2$$

$$x = \frac{Q^2}{2p \cdot q}, \quad y = \frac{p \cdot q}{p \cdot k}, \quad sxy = Q^2$$

$$\hat{s} = 2k \cdot p_q = 2\xi k \cdot p = \xi s = \xi \frac{Q^2}{xy},$$

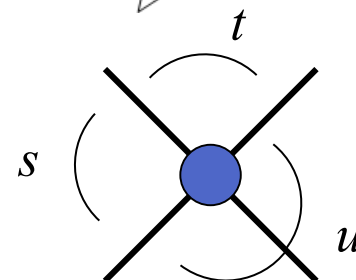


$Q^2$  は移行運動量

$y$  は散乱角

$x$  はクォークの縦方向  
運動量と関係あり

$$\hat{t} = (k - k')^2 = -Q^2$$



$$\hat{u} = (p_q - k')^2 = 2p_q \cdot k' = 2\xi p \cdot (k - q) = 2\xi p \cdot k(1 - y) = \hat{s}(1 - y)$$

# 電子・クォーク散乱から電子・陽子散乱へ

代入すると  $eq \rightarrow eq$  の断面積は 
$$\frac{d\sigma}{dQ^2} = \frac{2\pi\alpha^2 e_q^2}{Q^4} [1 + (1-y)^2]$$

本物の陽子はたくさんのクォークが入っているから、そのように式を変えないといけない。

一個の点粒子の「構造」関数を 
$$\hat{F}_2(x) = x e_q^2 \delta(x - \xi)$$
 のように定義

ここで、 $\delta(x - \xi)$  を付け加え、電子の kinematics から期待される運動量比と、実際にクォークが持つ運動量比とが等しい場合にのみ散乱、と考えると

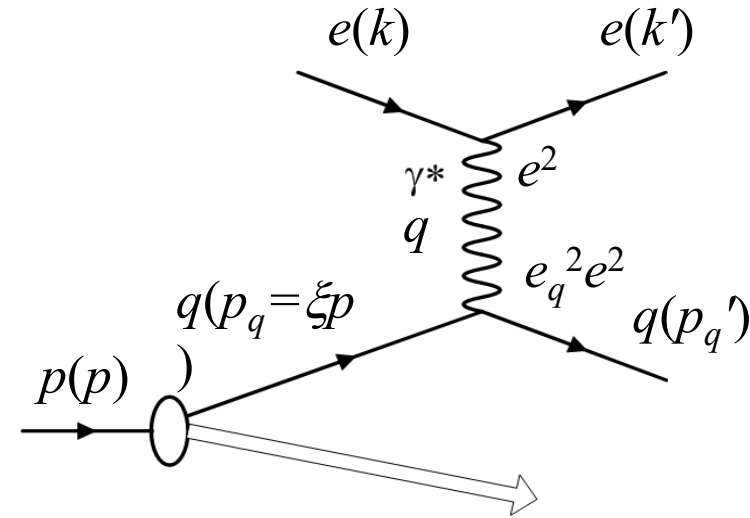
$$\frac{d^2\sigma}{dQ^2} = \int \frac{4\pi\alpha^2}{Q^4} [1 + (1-y)^2] \frac{1}{2} e_q^2 \delta(x - \xi) dx$$

# 電子・陽子散乱の断面積

$$\frac{d^2 \hat{\sigma}}{dx dQ^2} = \frac{4\pi\alpha^2}{Q^4} [1 + (1-y)^2] \cdot \frac{1}{2} e_q^2 \delta(x - \xi)$$

ここで  $x e_q^2 \delta(x - \xi) = \hat{F}_2$  とすると

$$= \frac{4\pi\alpha^2}{xQ^4} \left( 1 - y + \frac{y^2}{2} \right) \hat{F}_2$$



$\hat{F}_2$  を  $\xi$  で積分したものを陽子の構造関数  $F_2(x)$  とすると

$$F_2(x) = \sum_{q, \bar{q}} \int_0^1 d\xi q(\xi) x e_q^2 \delta(x - \xi) = \sum_{q, \bar{q}} e_q^2 x q(x) \quad \text{よって}$$

$$\frac{d^2 \sigma}{dx dQ^2} = \frac{4\pi\alpha^2}{xQ^4} \left[ \left( 1 - y + \frac{y^2}{2} \right) F_2(x, Q^2) \right]$$

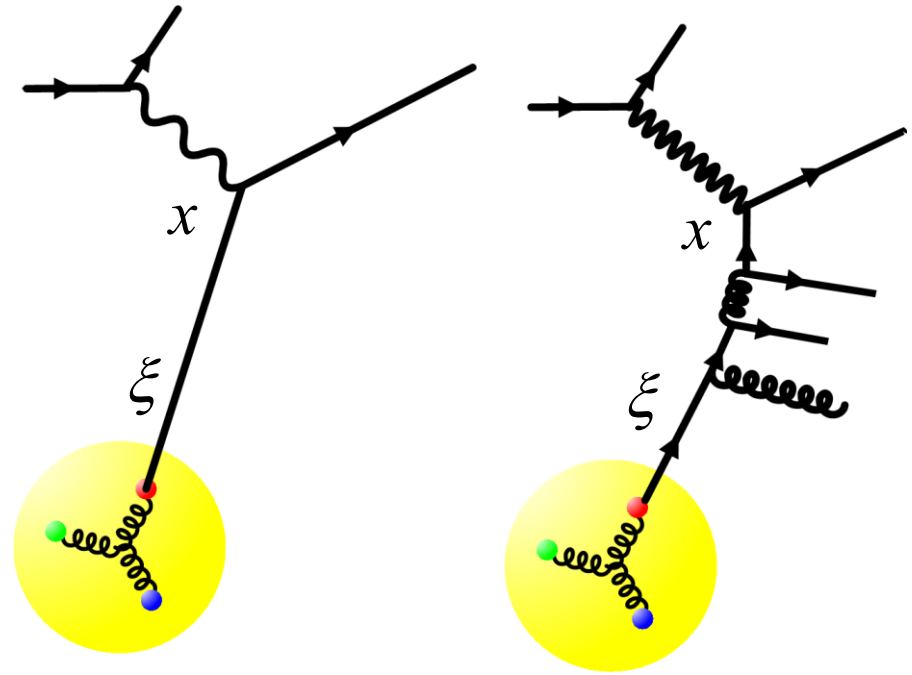
$$s = k \cdot p, \quad Q^2 = -q^2 = -(k - k')^2$$

$$x = \frac{Q^2}{2p \cdot q}, \quad y = \frac{p \cdot q}{p \cdot k}, \quad sxy = Q^2$$

電子が「直接」クォークをたたく場合には  $Q^2$  には依存しないが、たたく前に粒子を放出すると  $\delta(x - \xi)$  が複雑な関数になり、依存するようになる(このあとすぐ)

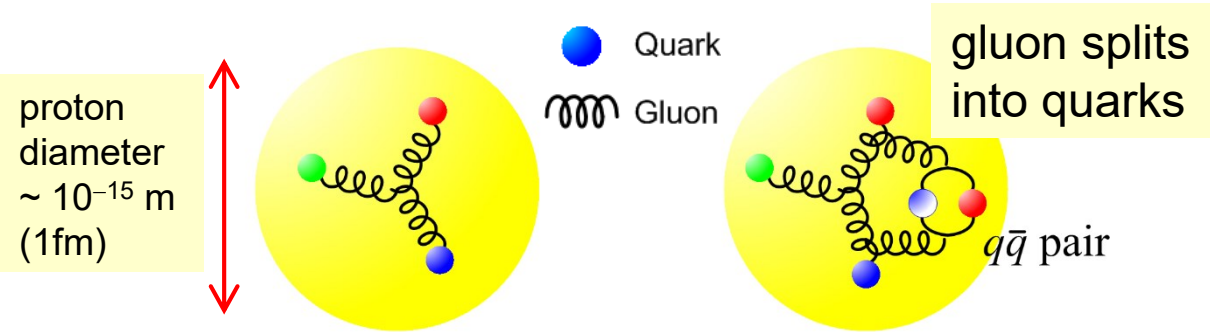
# 「直接」？

- 実際の意味：クォークが電子に散乱される前に粒子（たいていグルーオン）を放出すると、 $x$  と  $\xi$  とは等しくなくなる

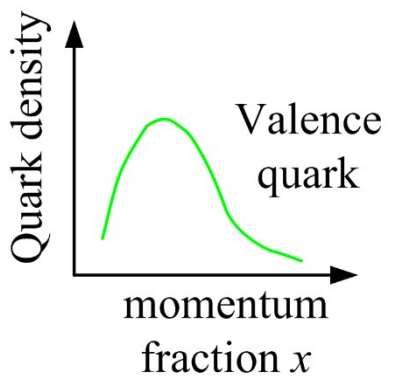


- もし仮想光子とクォークとの反応が一瞬で起きるとすると、クォークはその間に他の陽子中のクォークと反応したり、粒子を放出する暇なく、自由粒子として振る舞うと仮定できる（上図の左）。このようなモデルをクォーク・パートンモデル (QPM) という。
- すると、構造関数  $F_2 =$  クォークの電荷密度は  $Q^2$  に依らない（有名な Bjorken スケーリング）が、実際には依る（右図）。

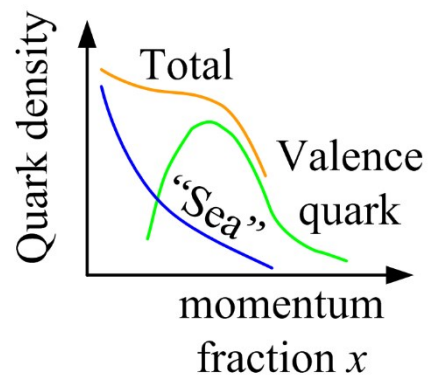
# 固定標的実験での陽子構造測定



- $Q^2$  が大きくなると波長が短くなる
  - 細かい内部構造が見えてくる
  - グルーオンがクォーク・半クォーク対に分解してできる「Sea (海) クォーク」



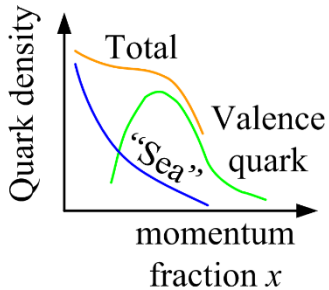
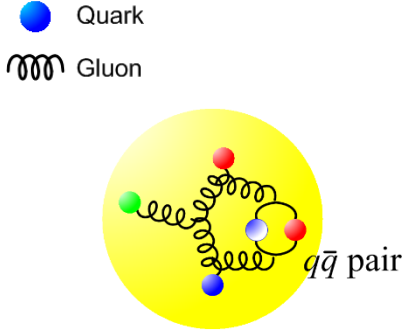
early fixed target exp'ts  
 $Q \sim 1-3 \text{ GeV}$  ( $10^{-1} \text{ fm}$ )



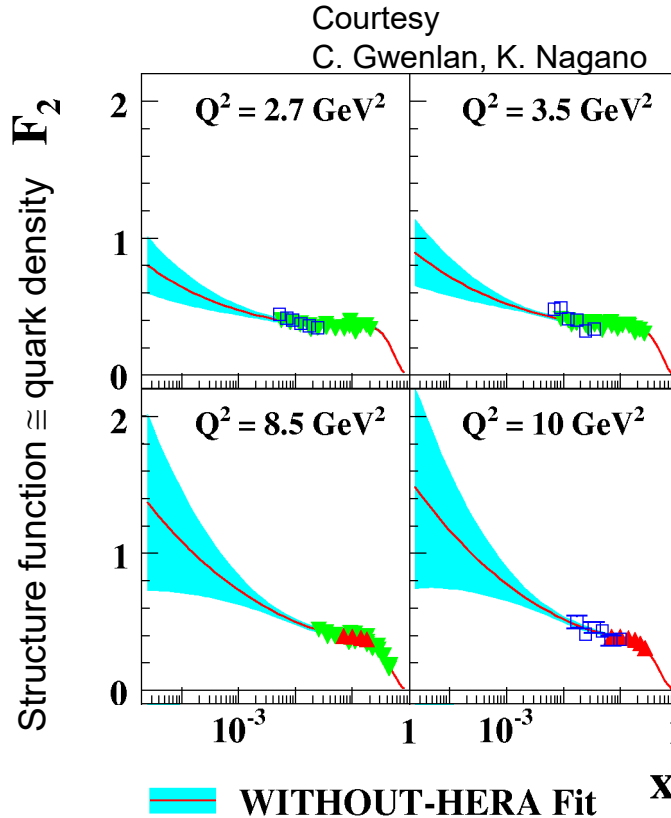
recent fixed target + muon  
 $Q \sim 1-10 \text{ GeV}$  ( $10^{-2} \text{ fm}$ )

Increasing resolution (large  $Q^2$ )  
 $Q^2 \approx \frac{1}{\lambda^2}$

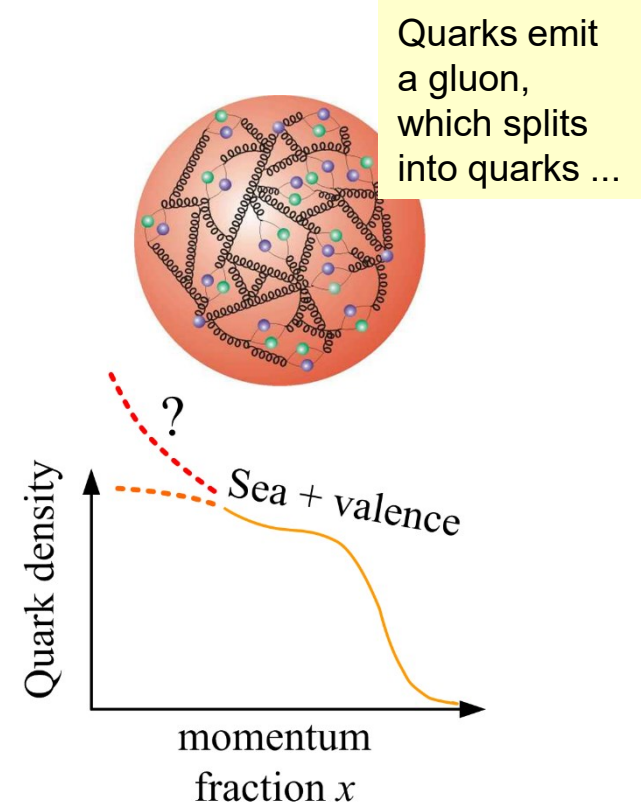
# HERA実験までのクォーク分布



recent fixed target + muon  
 $Q \sim 1-10 \text{ GeV}$  ( $10^{-2} \text{ fm}$ )



- E665
- ▲ BCDMS
- ▼ NMC

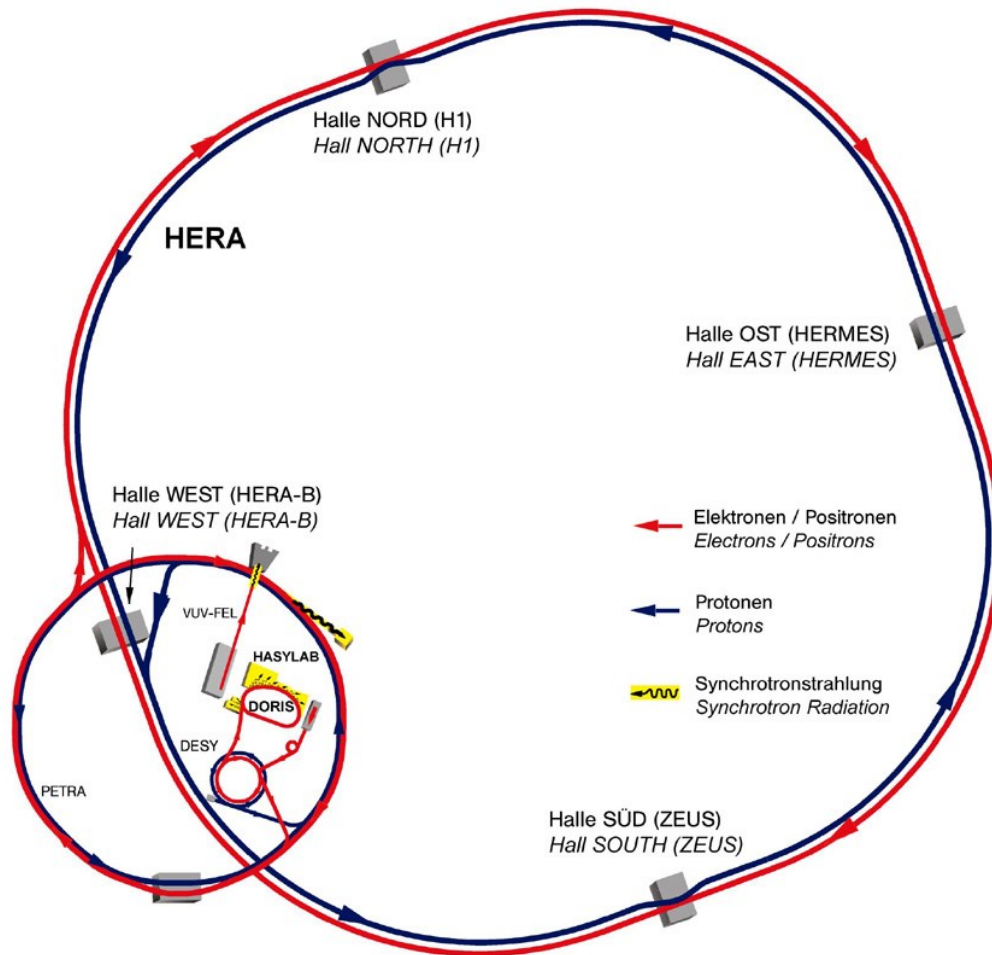


HERA  
 $Q > 1-300 \text{ GeV}$  ( $< 10^{-3} \text{ fm}$ )

Increasing resolution (large  $Q^2$ )

- 固定標的ではわからなかった、低い運動量比 (小さい  $x$ ) での構造は？

# 衝突型電子・陽子衝突 HERA 実験



- 周長 6.3 km  
(陽子・反陽子衝突型加速器  
Tevatron とほぼ同じ)

- 陽子ビーム: 920 GeV

- (陽)電子ビーム:  
27.5 GeV

→ 重心系エネルギー

$$\sqrt{s} = 318 \text{ GeV}$$

(構造を $10^{-18}\text{m}$ =陽子の大きさの1/1000まで見る事ができる)





ドイツ・ハンブルク市西のDESY研究所にある

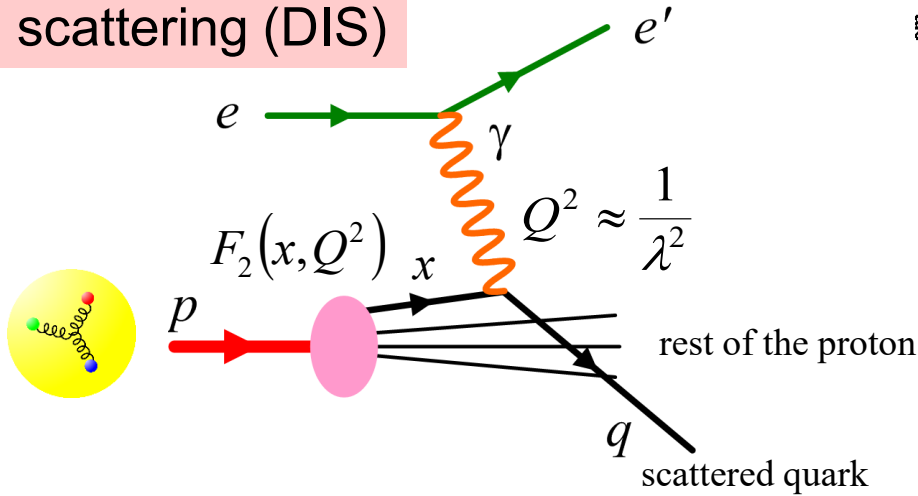


加速器：陽子（上段），電子の2階建て  
陽子を曲げる磁場は超伝導磁石

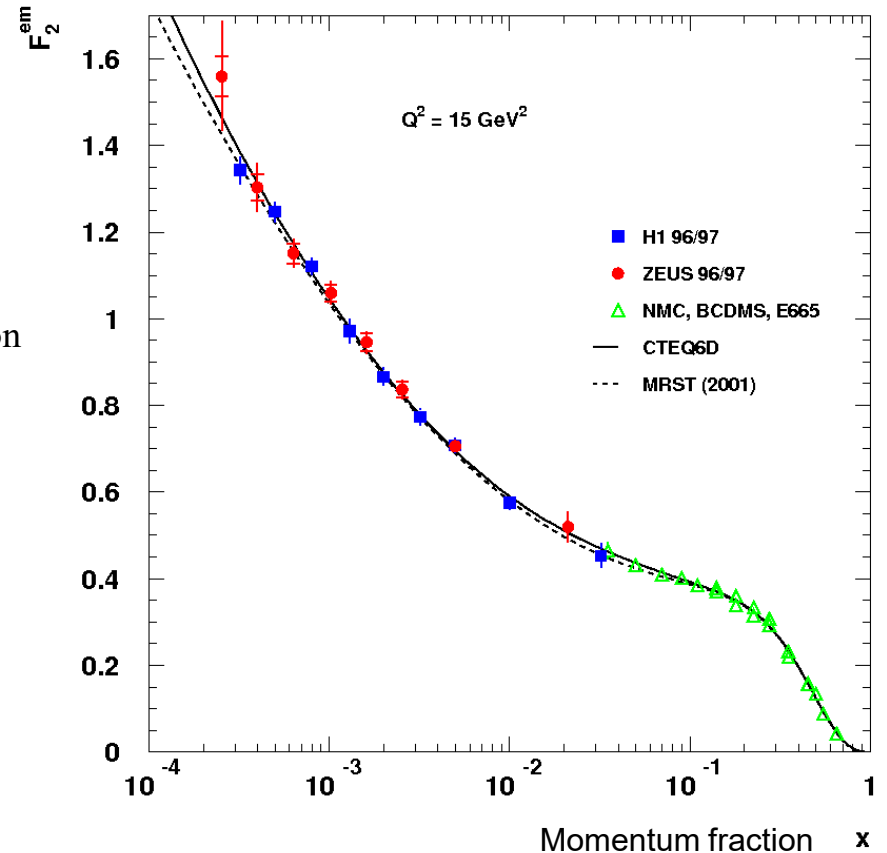


# HERAでの構造関数測定

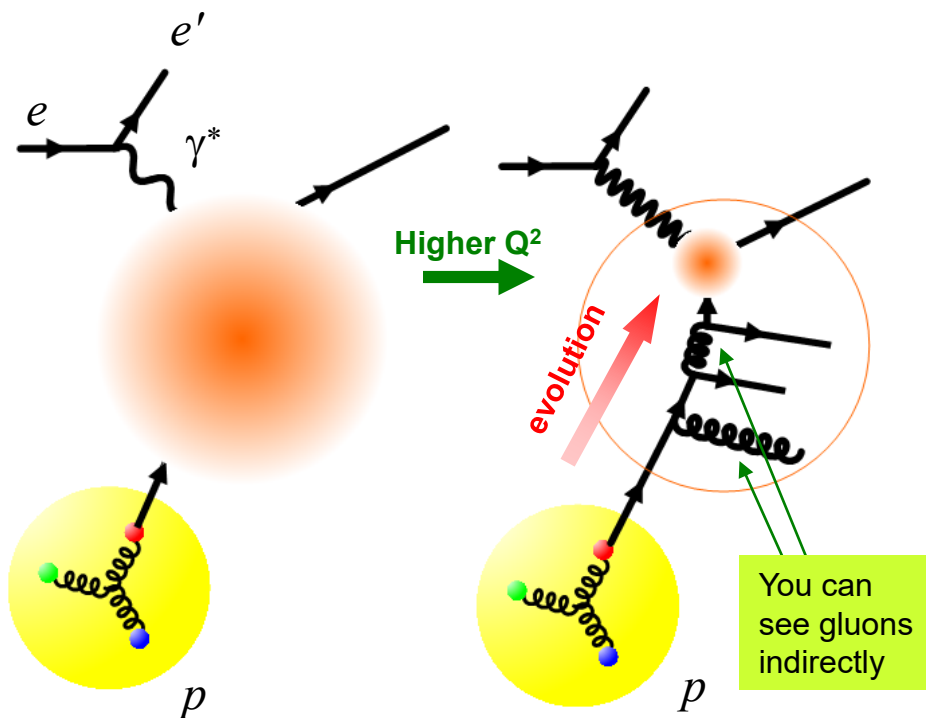
Deep-inelastic scattering (DIS)



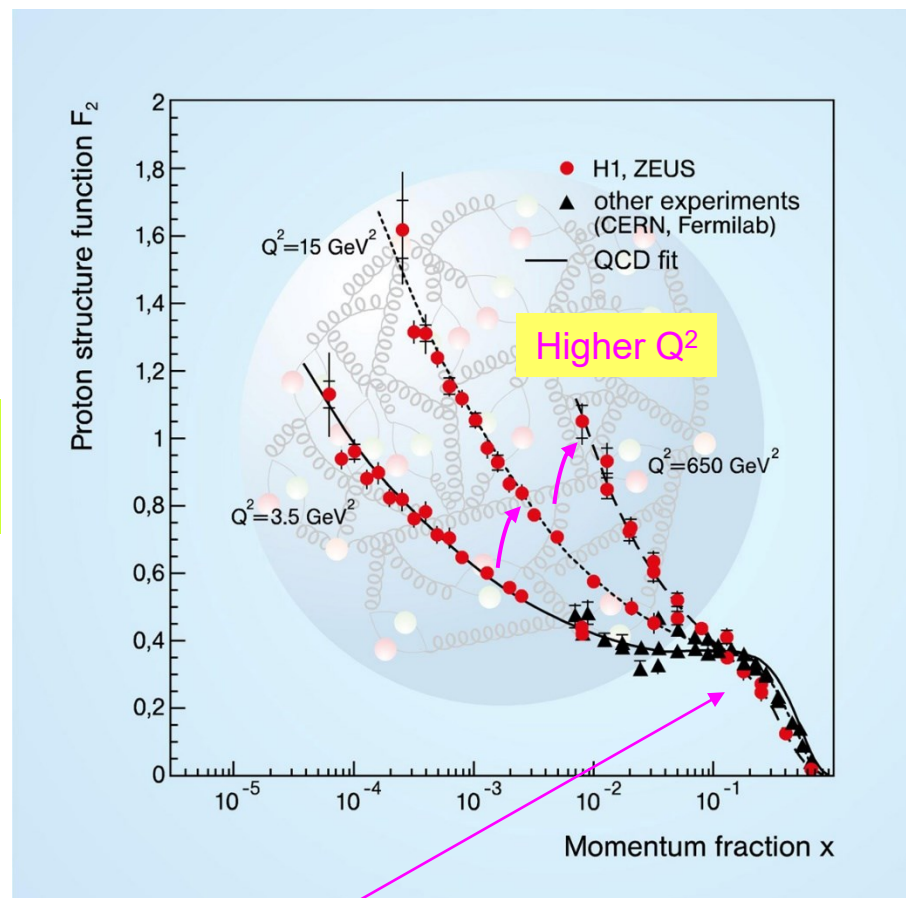
- $F_2(x) = e^2_q x(q(x) + \bar{q}(x))$ 
  - $F_2$  はクォーク密度  $q(x)$  に比例
  - $x$  と  $Q^2$  の関数
- 海クォークが低い  $x$  に向けて急速に増えている



# 解像度を上げるとたくさんのクォークが見えてくる

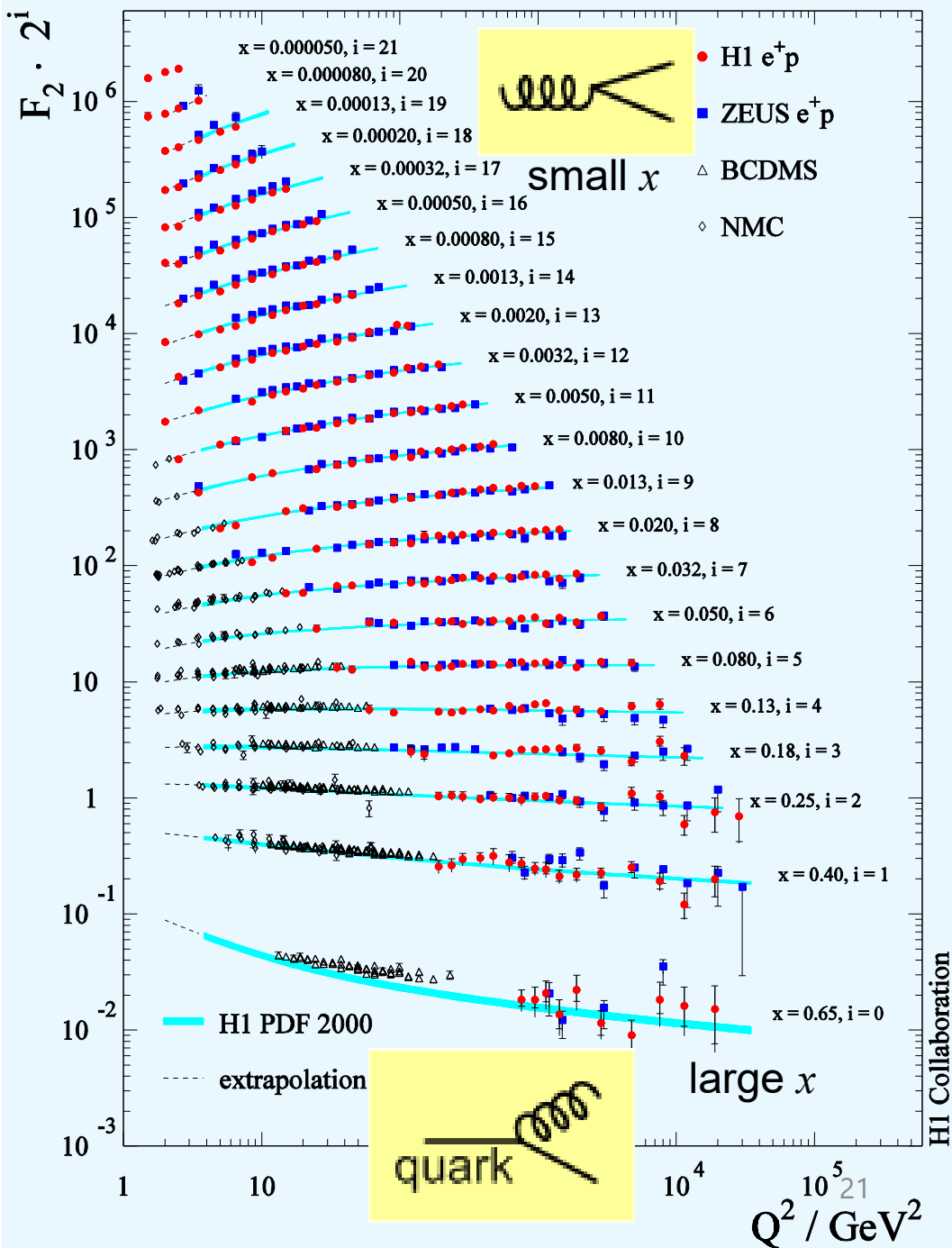


- 海クォークがより高い $Q^2$ で動的に作られている。
- この振る舞いは、有名な DGLAP (Dokschitzer-Gribov-Lipatov-Altarelli-Parisi) 発展方程式により予言されていた。
  - 摂動論的QCDに基づいている。

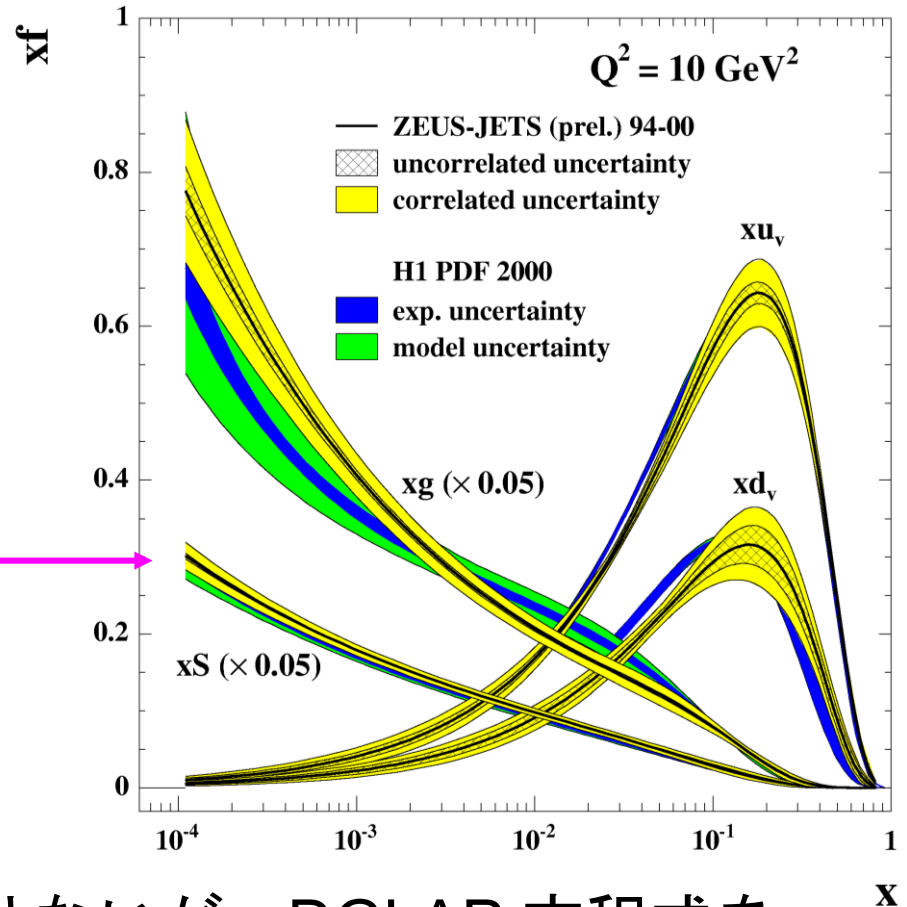
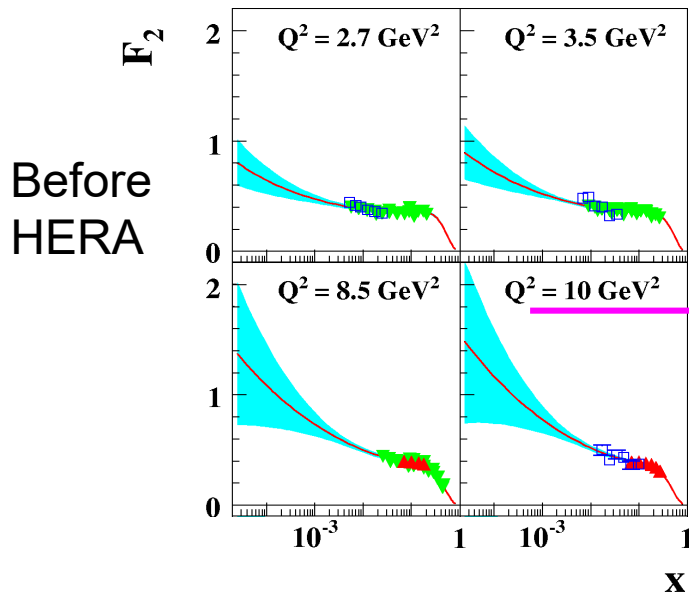


# Q<sup>2</sup>の関数でみた クォーク密度

- 構造関数が非常に精度よく求まっている  
(LHCへの準備ができた！)
- DGLAP方程式で予言された、クォークと  
**グルーオン**の動的な生成が見て取れる
  - F<sub>2</sub> の傾きからグルーオン分布が求まる。



# クォーク, グルーオン 密度決定の結果



- グルーオンは直接の測定ではないが, DGLAP 方程式を用いて精度よく決めることができる
- 低い  $x$  の領域ではグルーオンの量が圧倒的に多い
- HERAの測定で精度が飛躍的に上がった

# DGLAP 方程式によるフィット (1)

- LO DGLAP 方程式

$$\frac{d}{d \log(t/\mu^2)} f_q(x,t) \begin{array}{c} q \\ \nearrow \\ \circ \\ \searrow \\ \text{---} \end{array} = \int_x^1 \frac{dz}{z} \frac{\alpha_s}{2\pi} \begin{array}{c} P_{qq}(z) \quad q \\ \nearrow \\ \circ \\ \searrow \\ \text{---} \end{array} f_q(x/z,t) + \int_x^1 \frac{dz}{z} \frac{\alpha_s}{2\pi} \begin{array}{c} P_{gq}(z) \quad q \\ \nearrow \\ \circ \\ \searrow \\ \text{---} \end{array} f_g(x/z,t)$$

$$\frac{d}{d \log(t/\mu^2)} f_g(x,t) \begin{array}{c} g \\ \nearrow \\ \circ \\ \searrow \\ \text{---} \end{array} = \sum_{i=1}^{2n_f} \int_x^1 \frac{dz}{z} \frac{\alpha_s}{2\pi} \begin{array}{c} P_{qg}(z) \quad g \\ \nearrow \\ \circ \\ \searrow \\ \text{---} \end{array} f_q(x/z,t) + \int_x^1 \frac{dz}{z} \frac{\alpha_s}{2\pi} \begin{array}{c} P_{gg}(z) \quad g \\ \nearrow \\ \circ \\ \searrow \\ \text{---} \end{array} f_g(x/z,t)$$

- ということは、グルーオンの量は  $F_2$  の  $Q^2$  slope  
クォークの量は  $F_2$  の大きさそのものできまる
  - ただし電荷の不定性あり (up-type, down-type)



# Altarelli-Parisi splitting functions

$\hat{P}_{ba}(z)$ :  $a \rightarrow b(X)$  で  $b$  に  $a$  の  $z$  の割合の運動量が行く確率

$$\hat{P}_{qq}(z) = C_F \left[ \frac{1+z^2}{1-z} \right] : q \rightarrow q(g)$$

$$\hat{P}_{gq}(z) = C_F \left[ \frac{1+(1-z)^2}{z} \right] : q \rightarrow g(q)$$

$$\hat{P}_{qg}(z) = T_R [z^2 + (1-z)^2] : g \rightarrow qq$$

$$\hat{P}_{gg}(z) = 2C_A \left[ \frac{z}{1-z} + \frac{1-z}{z} + z(1-z) \right] : g \rightarrow gg$$

$$C_F = \frac{4}{3}, C_A = 3, T_R = \frac{1}{2}$$

Glueon が断然放射

$g \rightarrow qq$  は発散なし, それ以外は infrared divergence @  $z=1$  or  $0$



# DGLAP 方程式によるフィット (2)

- アイソスピン (u, d の比): 荷電カレントによる算出
  - 固定標的ではニュートリノ散乱  $\nu N \rightarrow \ell N' X$
  - 高エネルギーでは電子散乱  $e q \rightarrow \nu_e q'$  (終状態がジェットだけ)

$$\frac{d^2\sigma(e^-u \rightarrow \nu d)}{dx dQ^2} \propto \frac{G^2 s}{4\pi^2}$$

$$\frac{d^2\sigma(e^- \bar{d} \rightarrow \nu \bar{u})}{dx dQ^2} \propto \frac{G^2 s}{16\pi^2} (1 + \cos\theta)^2 = \frac{G^2 s}{4\pi^2} (1 - y)^2$$

$$\sigma^{CC}(e^-u) = A, \sigma^{CC}(e^- \bar{d}) = A(1 - y)^2$$

ここで,  $F_2^{W^-} = 2x(u + \bar{d})$ ,  $F_3^{W^-} = 2(u - \bar{d})$  とおくと,

$F_2, xF_3$  を用いて  $\frac{d^2\sigma(e^\pm p)}{dx dQ^2} = \frac{4\pi\alpha}{xQ^4} [(1 + (1 - y)^2)F_2 \mp (1 - (1 - y)^2)xF_3]$  が定義なので,  $e^-p$  なら,

$$\sigma^{CC}(e^-u) \propto [1 + (1 - y)^2]2x(u + \bar{d}) + [1 - (1 - y)^2]2x(u - \bar{d}) = 2x \cdot u$$

$$\sigma^{CC}(e^- \bar{d}) \propto [1 + (1 - y)^2]2x(u + \bar{d}) - [1 - (1 - y)^2]2x(u - \bar{d}) = 2x(1 - y)^2 \cdot \bar{d}$$

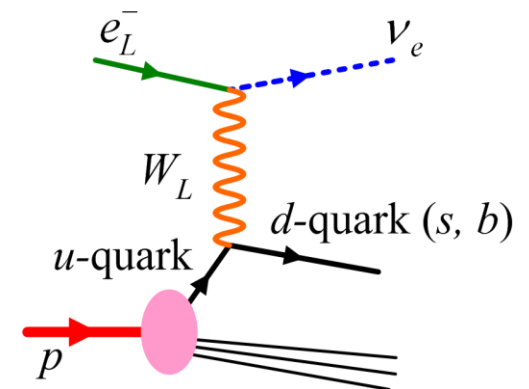
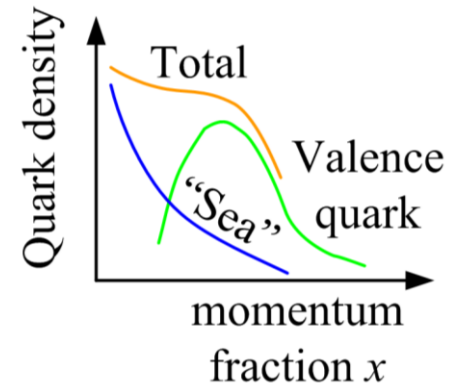
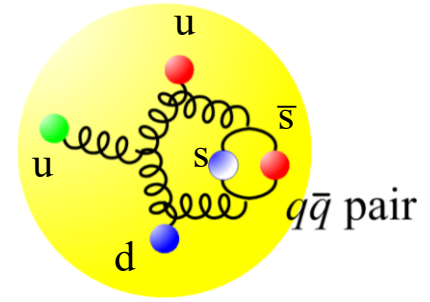
$e^+p, e^-p$  両方測れば, cross section の差から  $xF_3^{CC} \propto u - \bar{d} - \bar{s} + c \dots$  が取り出せる。

- 同様に, 中性カレントから  $\gamma - Z$  干渉により  $q - \bar{q}$  を取り出せる。

# Disentangling valence quarks

- Valence quarks: carrying the quantum number of the proton
  - Fermion  $\rightarrow$  3 quarks
  - Charge +1 (Isospin  $+1/2$ )  $\rightarrow$  (uud)
- Sea quarks:  $u = \bar{u} = d = \bar{d} = s = \bar{s}$
- Flavour decomposition by charged current (CC)
  - up-type quarks with  $e^-$
  - down-type quarks with  $e^+$
  - different scattering angle distribution for  $q$  and  $\bar{q}$

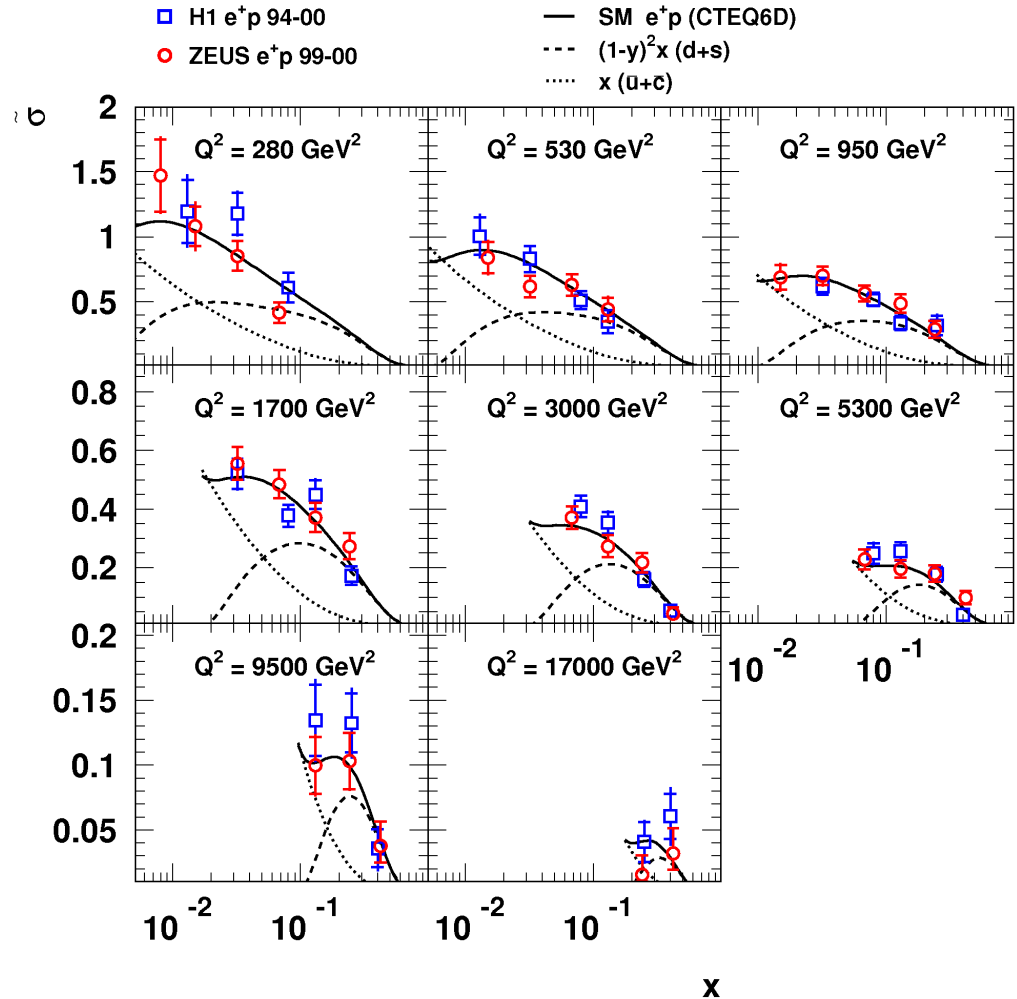
$$\begin{pmatrix} u \\ d \end{pmatrix} \begin{pmatrix} c \\ s \end{pmatrix} \begin{pmatrix} t \\ b \end{pmatrix} \begin{matrix} e^- \uparrow \\ e^+ \downarrow \end{matrix}$$



# Example of the CC measurement

## HERA $e^+p$ Charged Current

- Example:  $e^+p$  CC
  - $\bar{u}, \bar{c}$  produced uniformly in angle
  - $d, s$ : neutrino produced only in small scattering angle
  - Statistical error is large  
HERA-II analysis ongoing

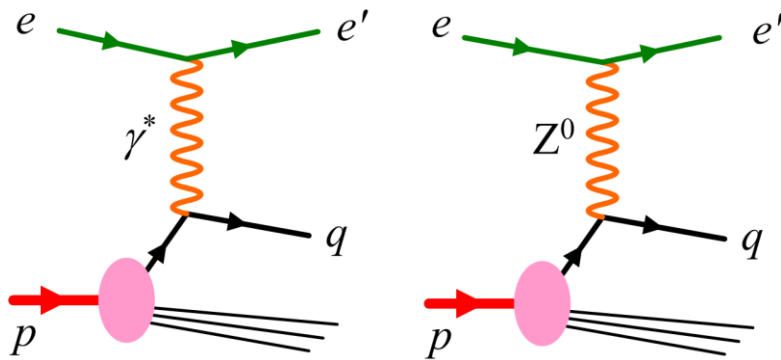


# Neutral current (NC) with $e^+$ and $e^-$ beam: disentangling valence and sea

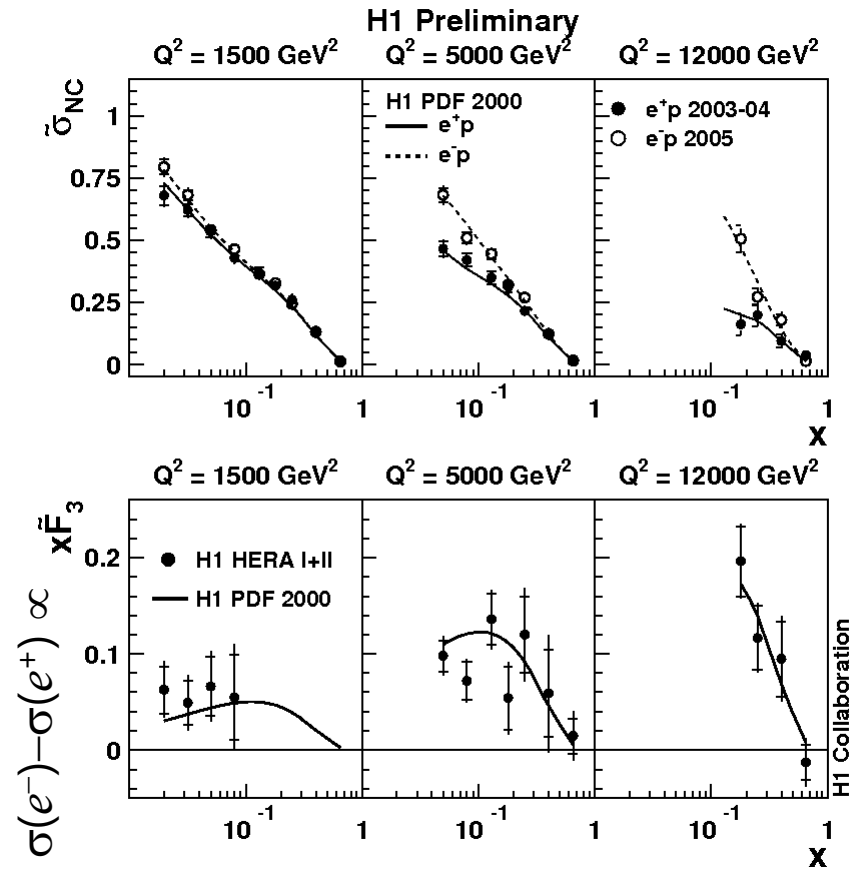
- Difference of  $e^-$  and  $e^+$  scattering gives amount of valence quarks

$$\sigma(e^-) - \sigma(e^+) \propto q - \bar{q}$$

From  $Z^0$  and  $Z^0$ - $\gamma$  interference

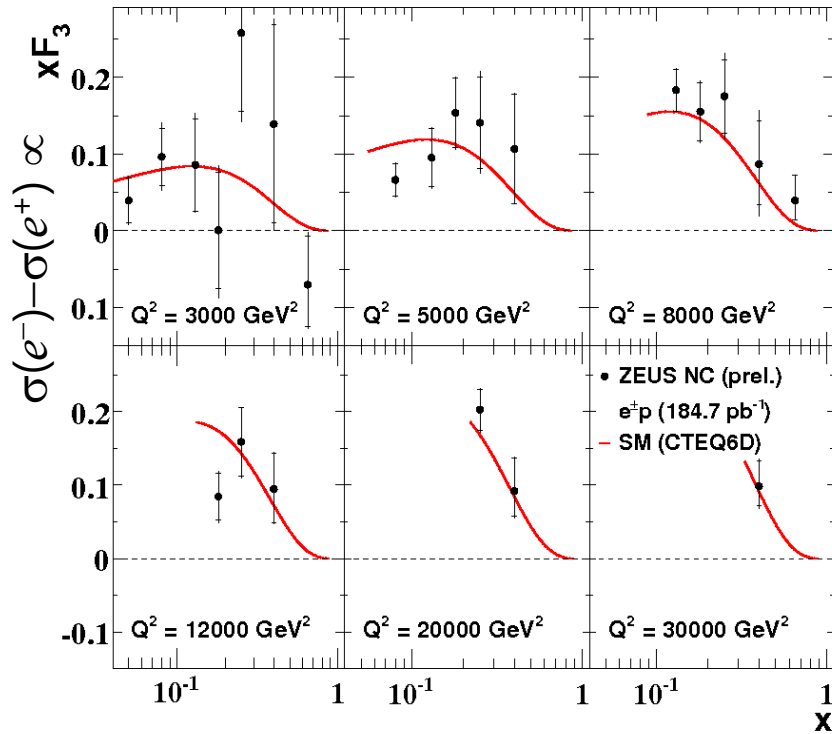


- Precision improved with large HERA-II  $e^-$  sample ( $130\text{pb}^{-1}$ )
  - $16\text{pb}^{-1}$  for HERA-I

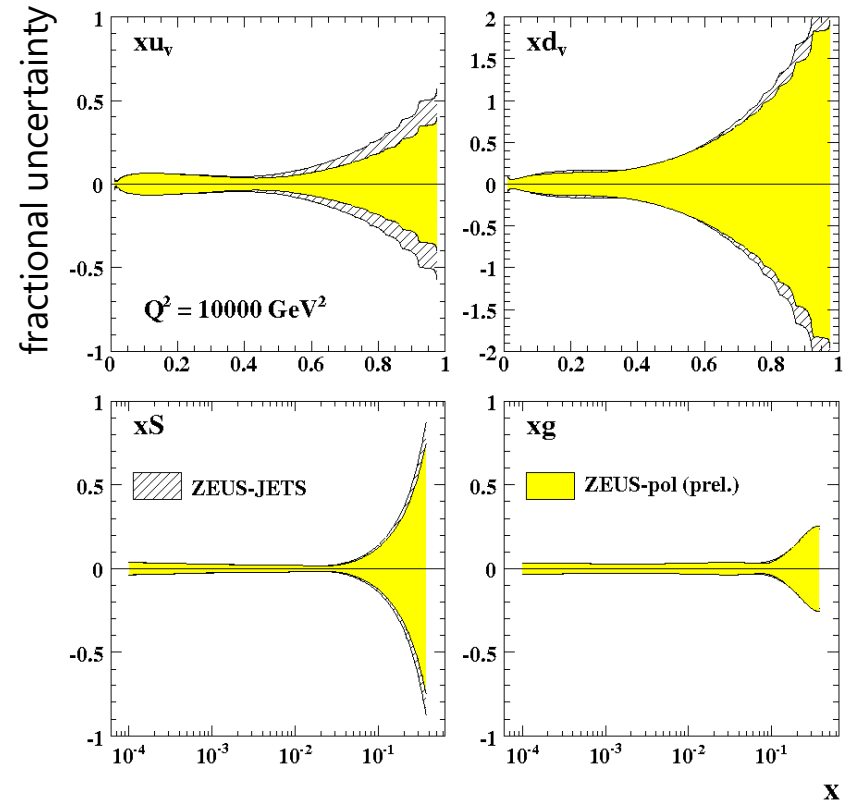


# Valence quark from NC (cont'd)

ZEUS



ZEUS



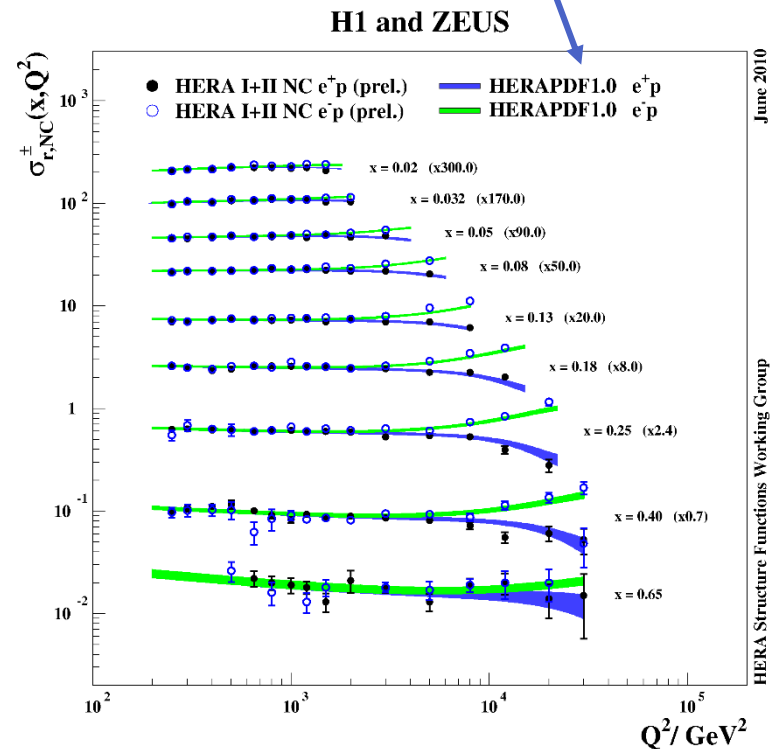
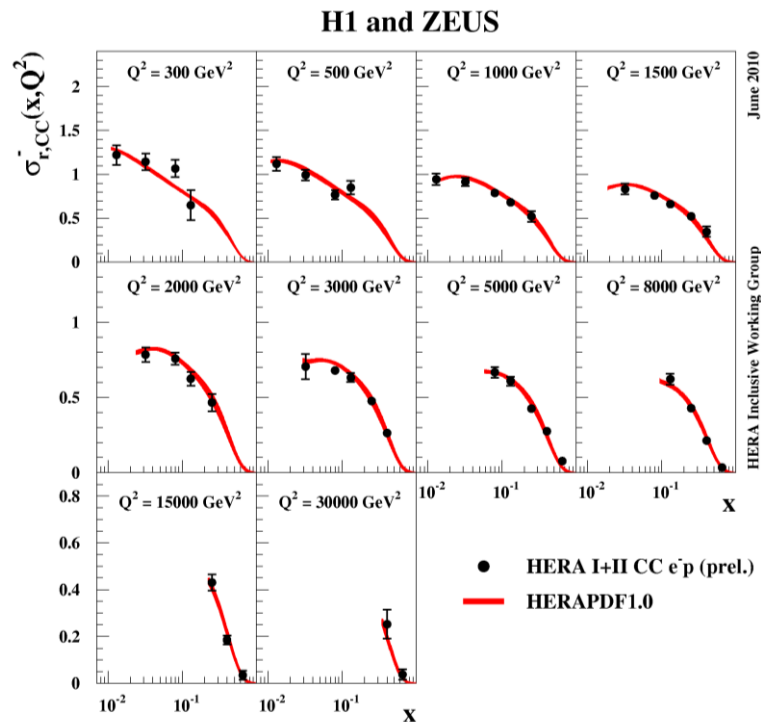
Now  $\sim 100 \text{ pb}^{-1}$  for  $e^+e^-$  each,  
will be  $200 \text{ pb}^{-1}$  each

Valence quark uncertainty reduced,  
in particular for u-quark

# NC/CC data and high-x pdfs

- NC/CC high- $Q^2$  data analysis finalised
- Combination of H1 and ZEUS data

PDF from HERA  
(without fixed target)  
but without these data



Give constraint also to valence quarks

# フィットの入力

- $Q^2 = Q_0^2$  で, クォーク, グルーオンがどれだけあるかわかっていたとする

$$\Sigma(\xi, Q_0^2), v(\xi, Q_0^2), g(\xi, Q_0^2)$$

- Parameterisation のよくある形

$$f(x, Q_0^2) = Ax^a(1-x)^b(1 + \sum_{i=1}^n a_i T_i^{Ch}(y(x))) \quad y = 1 - 2x^{0.5},$$

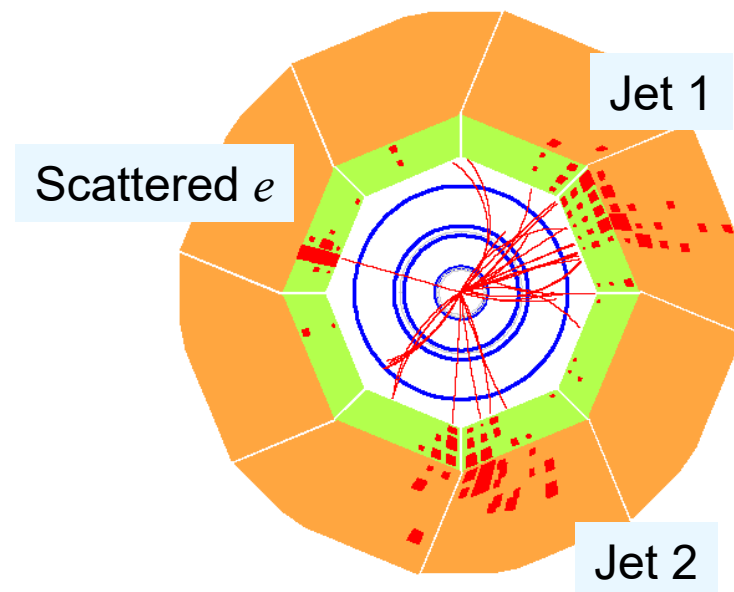
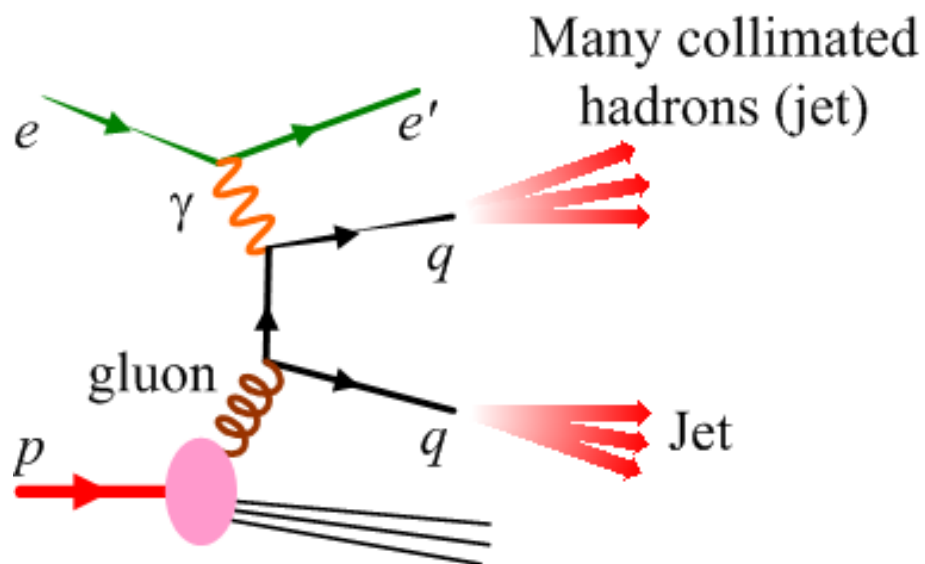
$T$ : Chebyshev polynomial (MMHT)

$$f(x, Q_0^2) = Ax^a(1-x)^b e^{c_1 x} (1 + e^{c_2 x})^{c_3} \quad CTxx$$

- これを DGLAP 方程式を用いて  $(x, Q^2)$  平面で発展させると, 全運動量平面での  $F_2(x, Q^2)$  が求まる
  - $g(\xi, Q^2)$  が大きければ,  $F_2$  はどんどん大きくなる
  - $q(\xi, Q^2)$  が大きければ, 逆に小さくなる

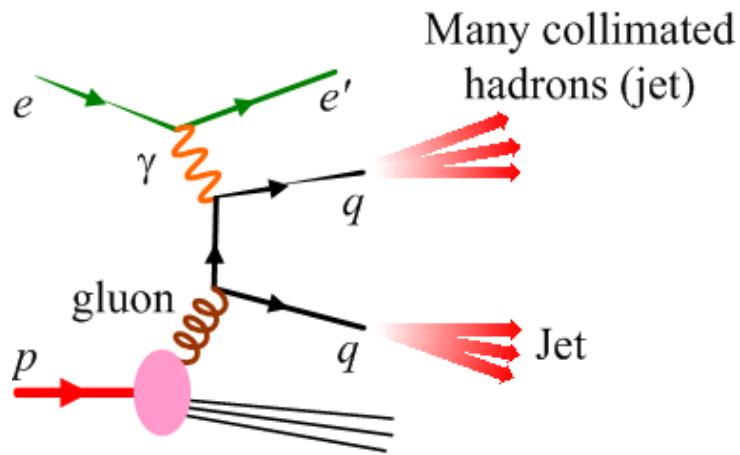
# グルーオンを直接測れないか？

- 先ほどの $F_2$ の傾きを用いる方法は、理論をかなり仮定していた。
- グルーオンを光子でなくクォークを介して「直接」たたく
- グルーオンの運動量：ジェットより逆算





# ジェット生成の測定結果

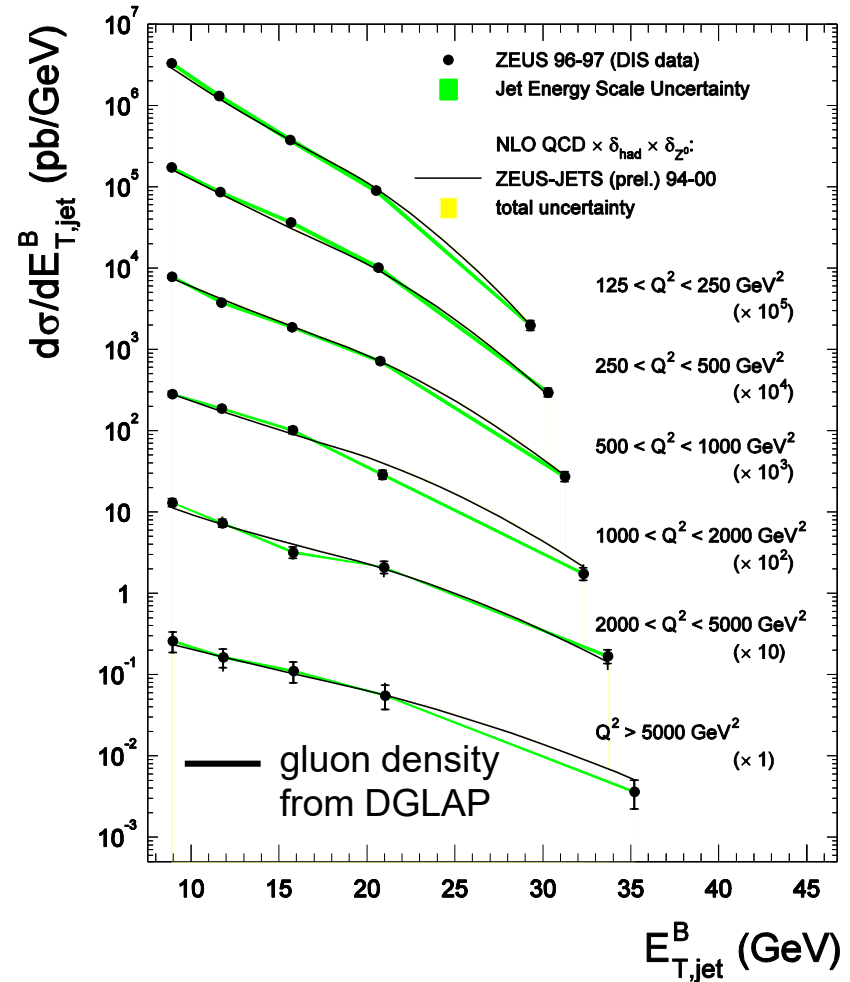


- ジェット生成の散乱断面積は、先ほどDGLAPで求めたグルーオン密度を用いたものとはよく一致

- LHCの主な過程はジェット生成：これでまた安心（たぶん）

- LHCでもジェットでグルーオン密度を測れる

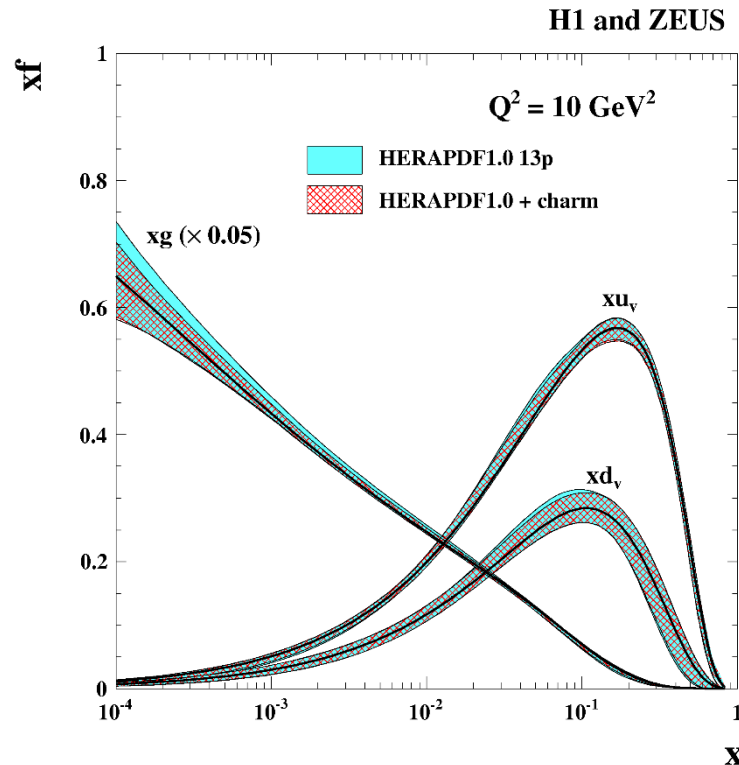
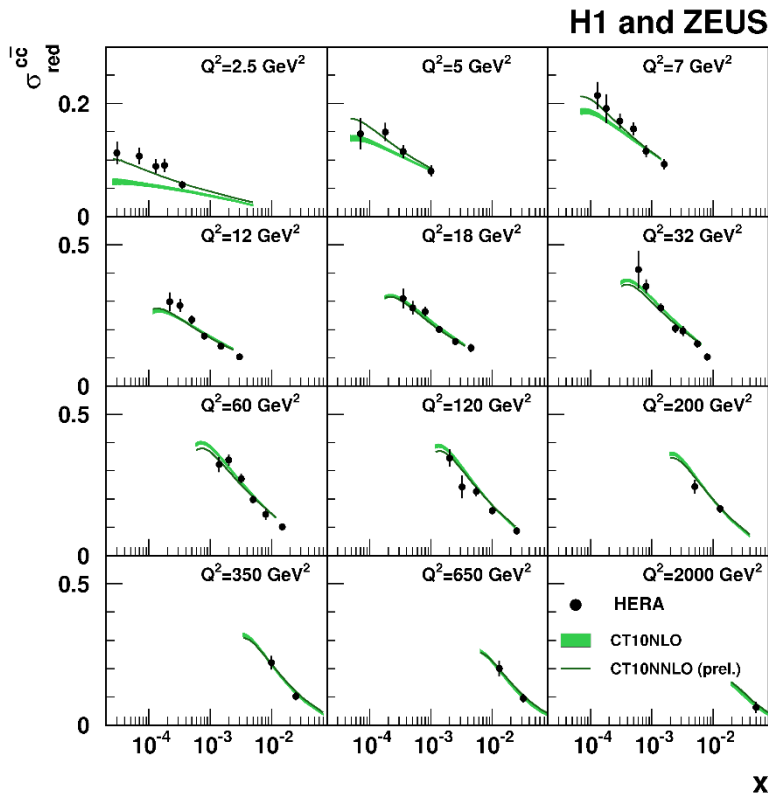
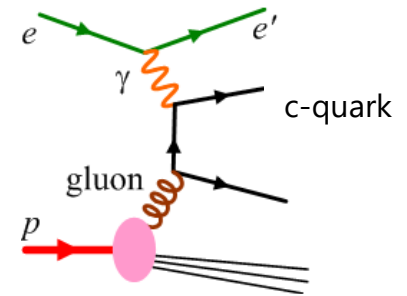
ZEUS



$e$  を  $p$  に  
 $\gamma$  が  $g$  に

# Improvement in low-x region

- With charm data  $F_2^{CC}(x, Q^2)$ 
  - Charm quarks are mostly produced from gluons

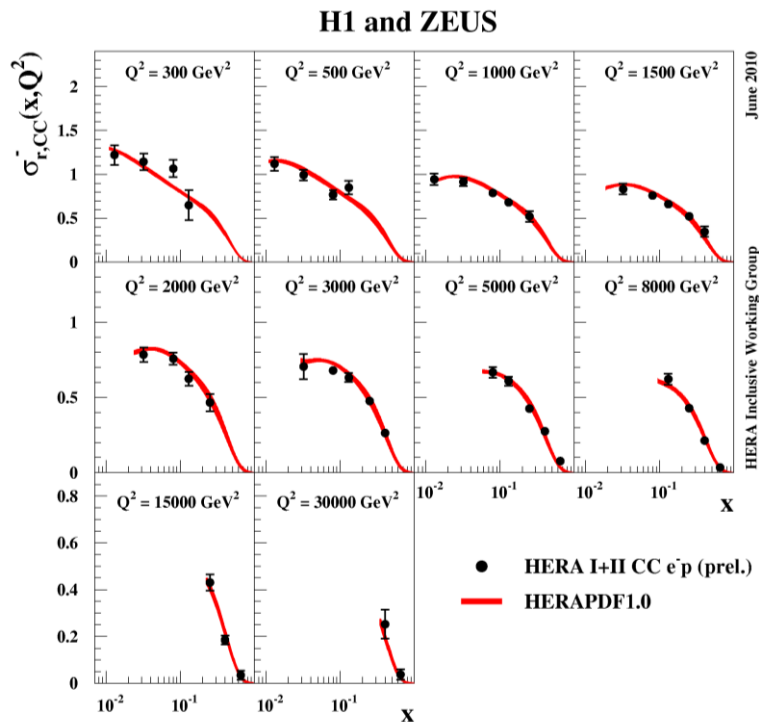


Gluons are better constrained at middle  $x$  ( $10^{-3} < x < 10^{-1.5}$ )

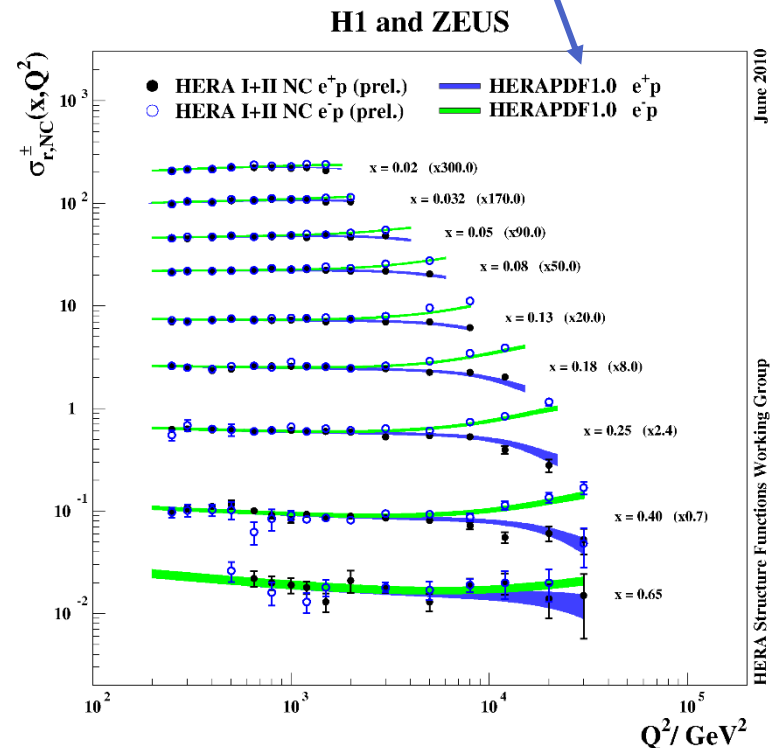
# NC/CC data and high-x pdfs

- NC/CC high- $Q^2$  data analysis finalised
- Combination of H1 and ZEUS data

PDF from HERA  
(without fixed target)  
but without these data



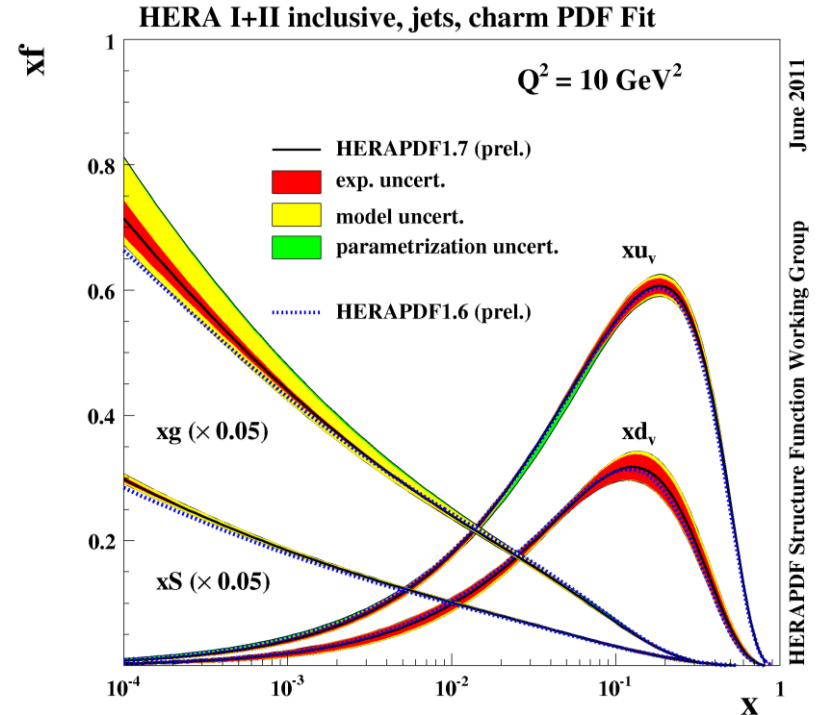
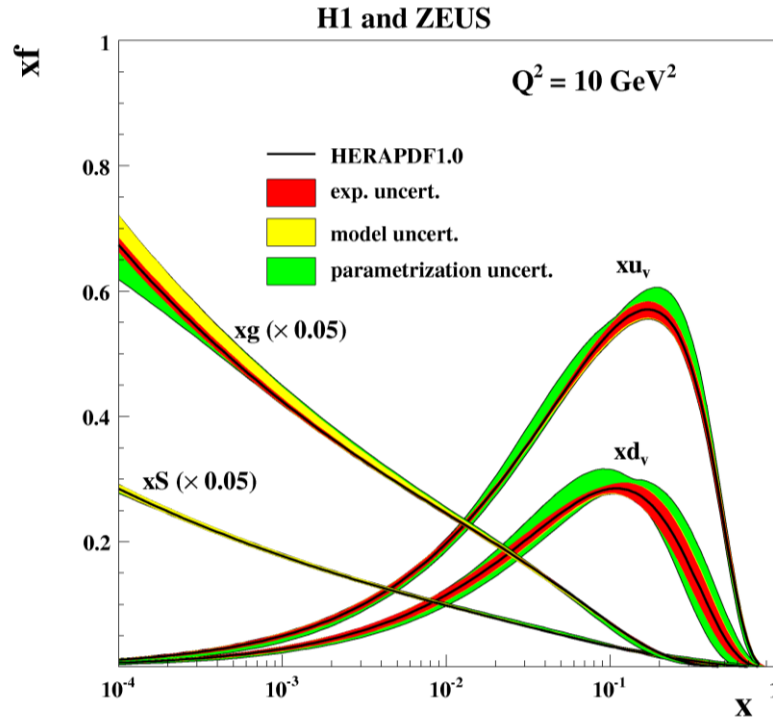
Charged current  $e^-p$



Neutral current  $e^\pm p$

Give constraint also to valence quarks

# Improvement in high-x regime



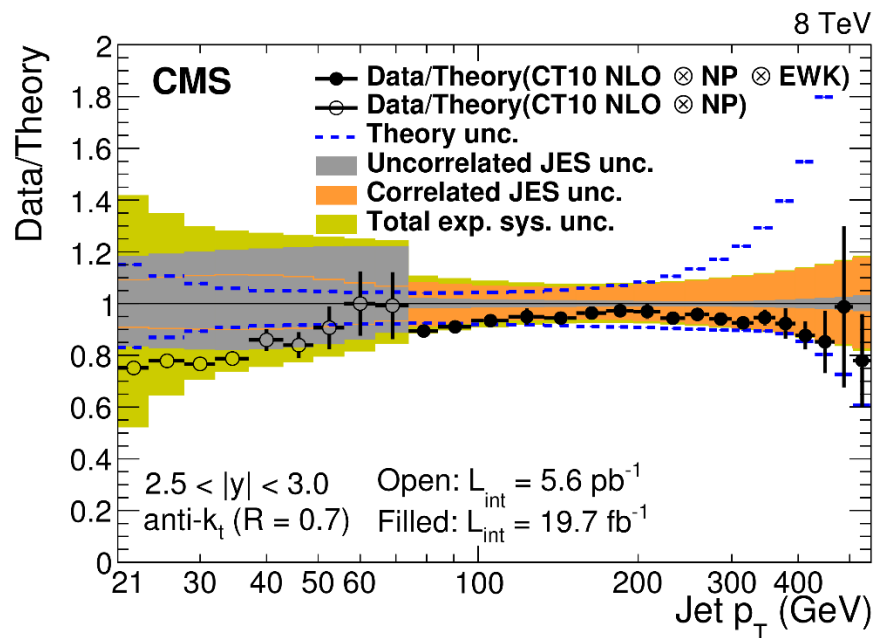
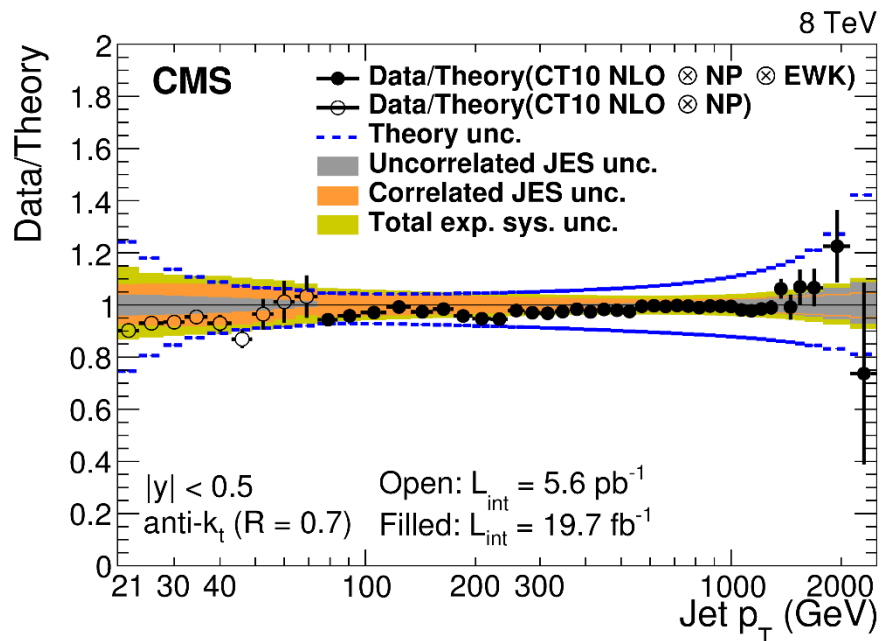
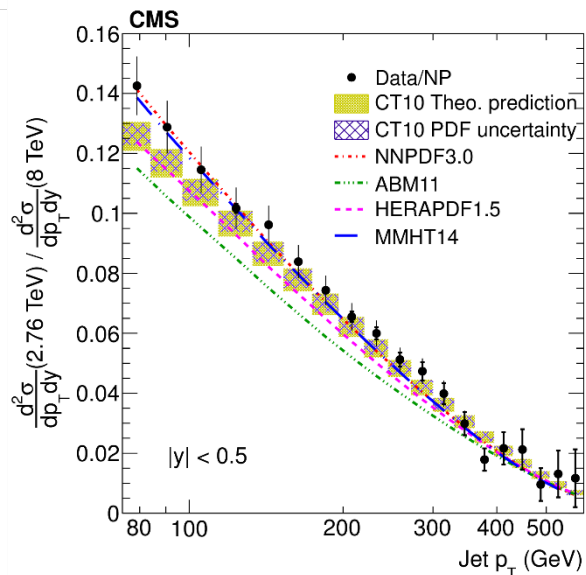
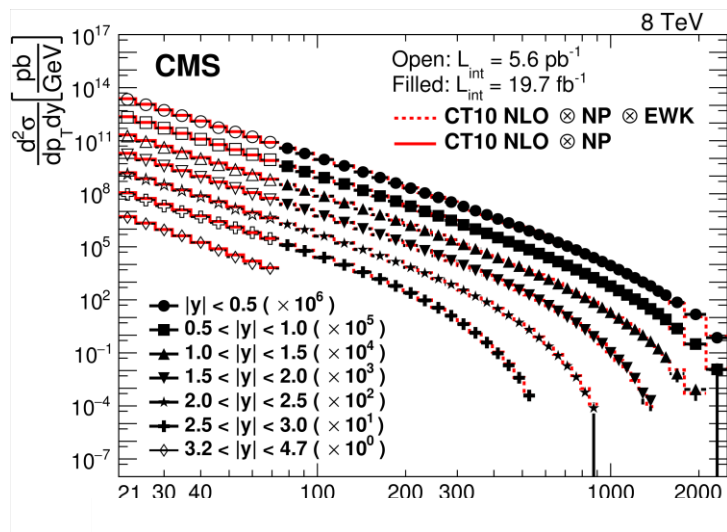
June 2011

HERAPDF Structure Function Working Group

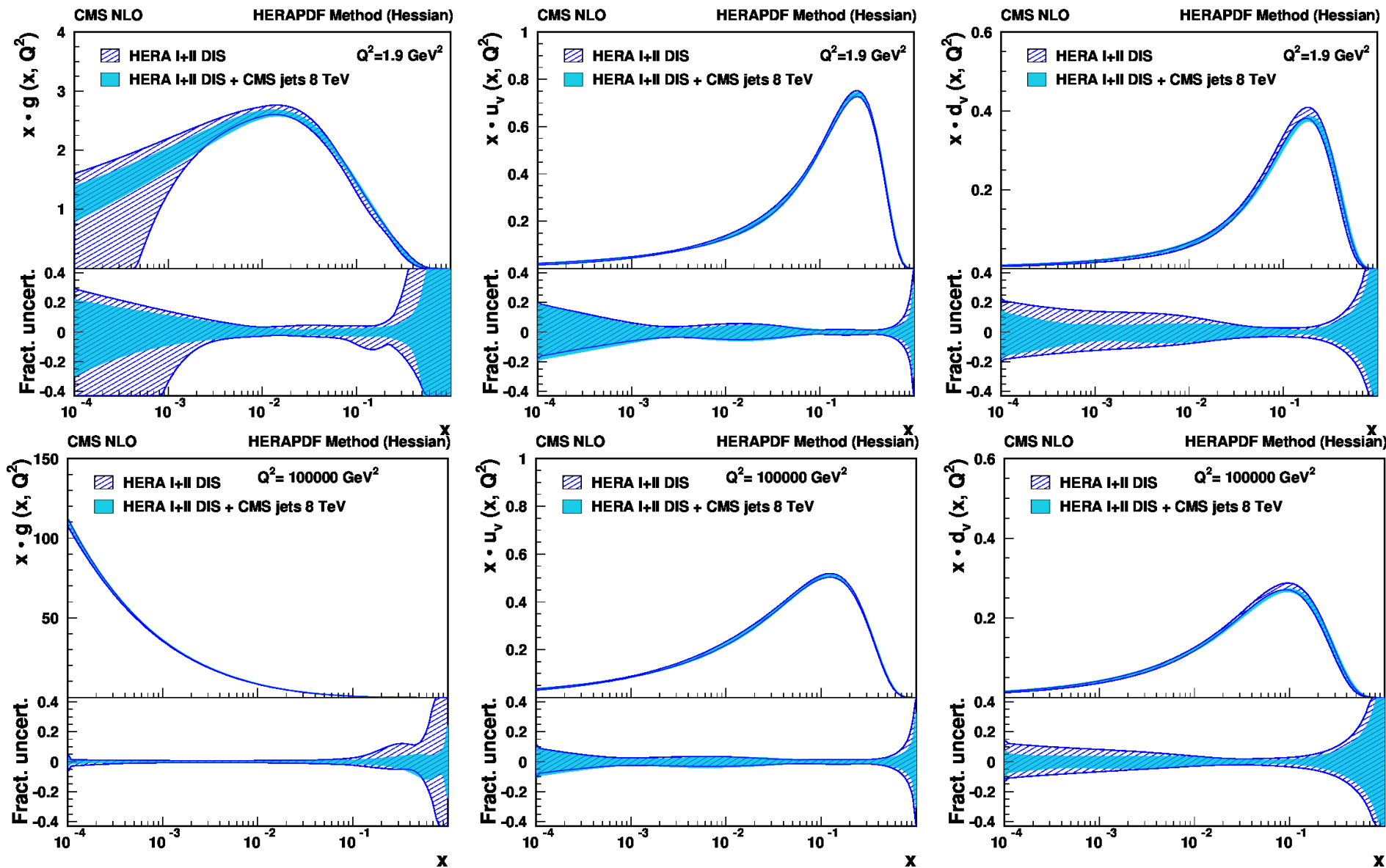
- Valence: better constrained, especially the shape
  - N.B. it does not use fixed target data
- Glue larger uncertainty
  - 10 vs 14 parameter fit

# LHC での パートン密度測定例

- CMS inclusive jet

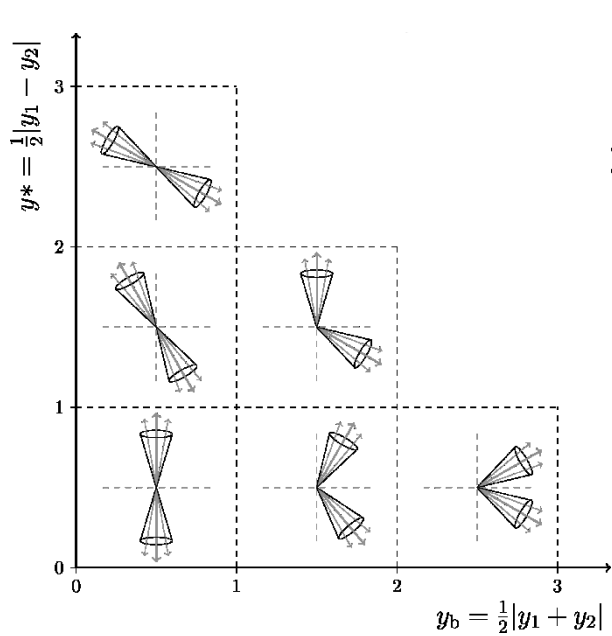


# HERA+CMS fit の結果



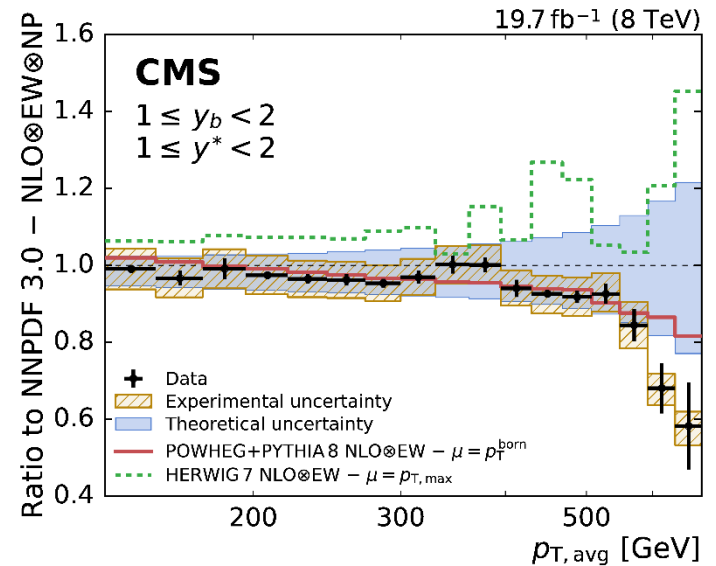
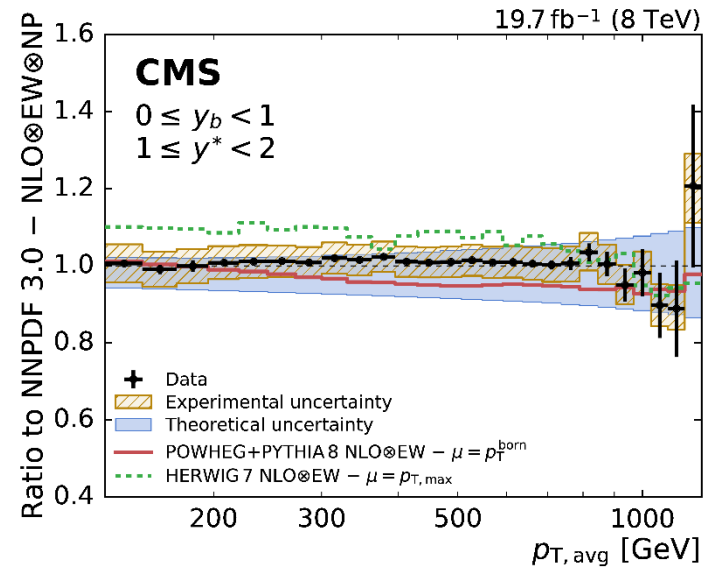
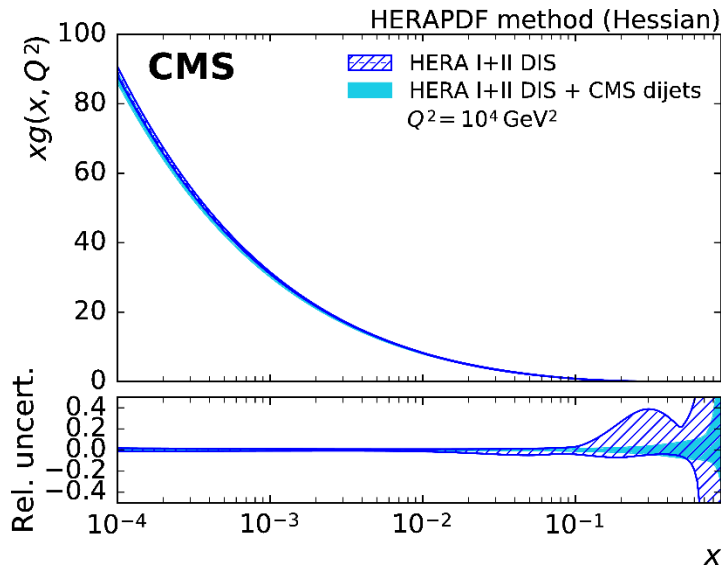
- Jet data により gluon constraint できる

# Triple differential cross section

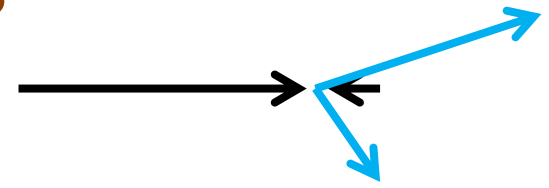


「夢」：
$$\frac{d^3\sigma}{dp_T dy_{avr} dy^*}$$

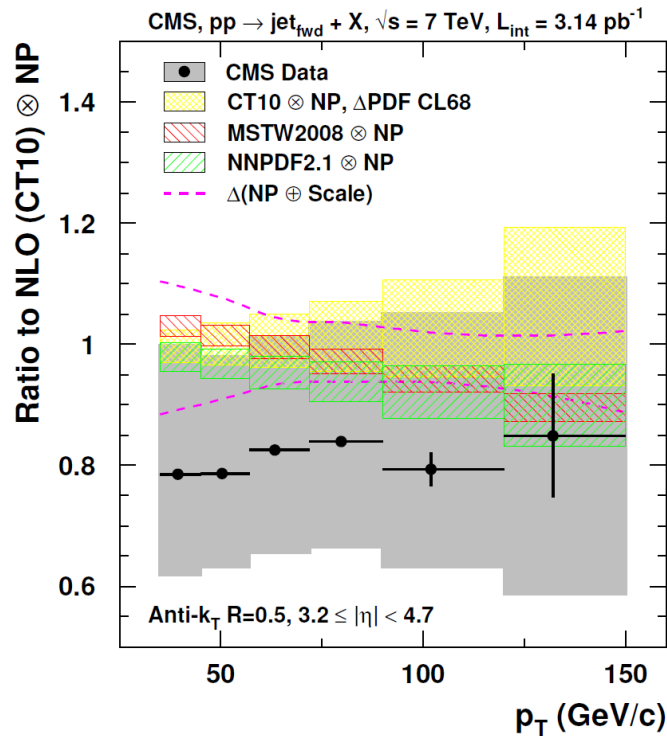
$x_2 - x_1$



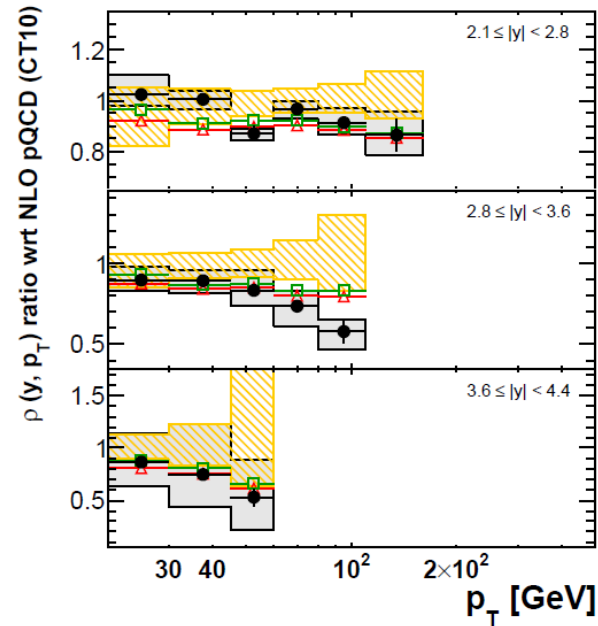
# LHC forward jets



- Jet production is sensitive to parton densities
  - Forward jet: low-x gluons



Jets in  $3.2 \leq |\eta| < 4.7$ , vs NLO



vs POWHEG  $\otimes$  PYTHIA  
(NLO interfaced to parton shower)

## ATLAS

$$\int L dt = 0.20 \text{ pb}^{-1}$$

$$\rho = \sigma_{\text{jet}}^{2.76\text{TeV}} / \sigma_{\text{jet}}^{7\text{TeV}}$$

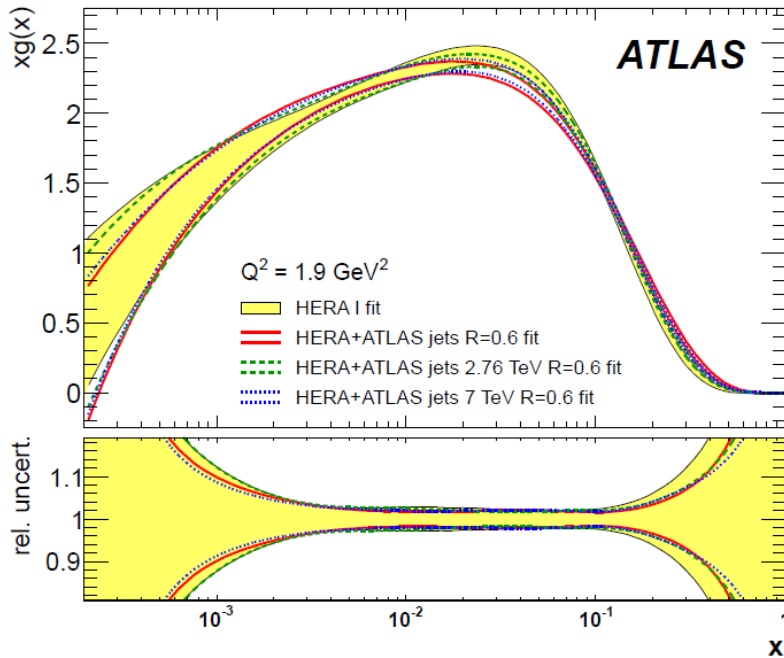
anti- $k_t$   $R = 0.6$

- Data with statistical uncertainty
- Systematic uncertainties
- NLO pQCD  $\otimes$  non-pert. corr. (CT10,  $\mu = p_T^{\text{max}}$ )
- POWHEG  $\otimes$  PYTHIA tune AUET2B (CT10,  $\mu = p_T^{\text{Bom}}$ )
- POWHEG  $\otimes$  PYTHIA tune Perugia 2011 (CT10,  $\mu = p_T^{\text{Bom}}$ )

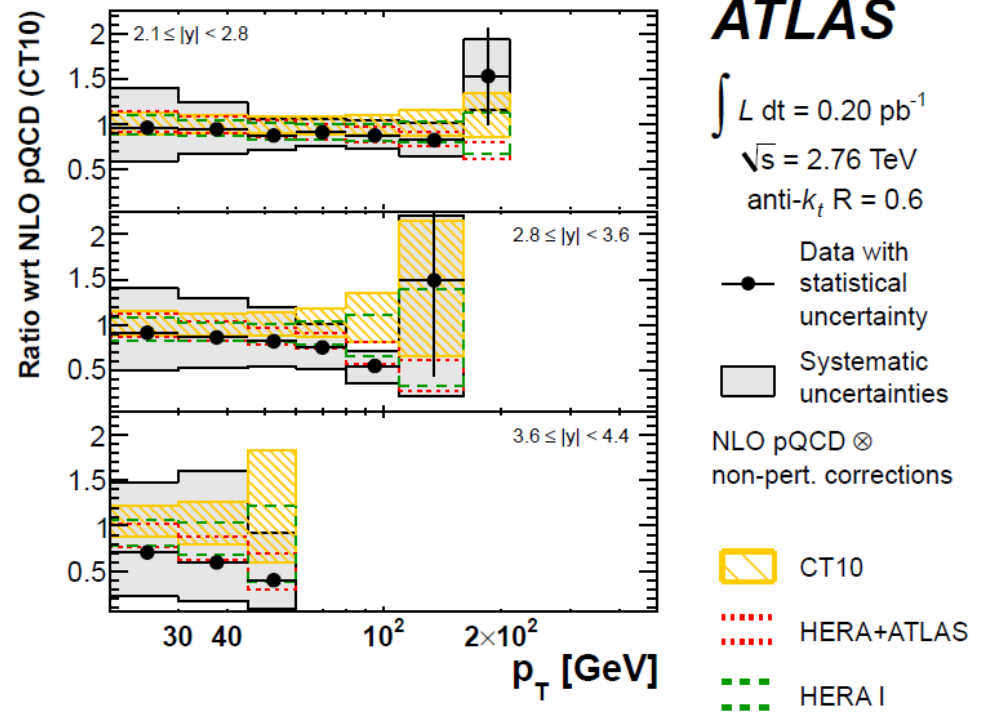
Forward cross sections are slightly lower than NLO



# Combined HERA+LHC fit using 2.76 TeV data



reducing mid – high- $x$  gluons  
also reducing low- $x$  gluons

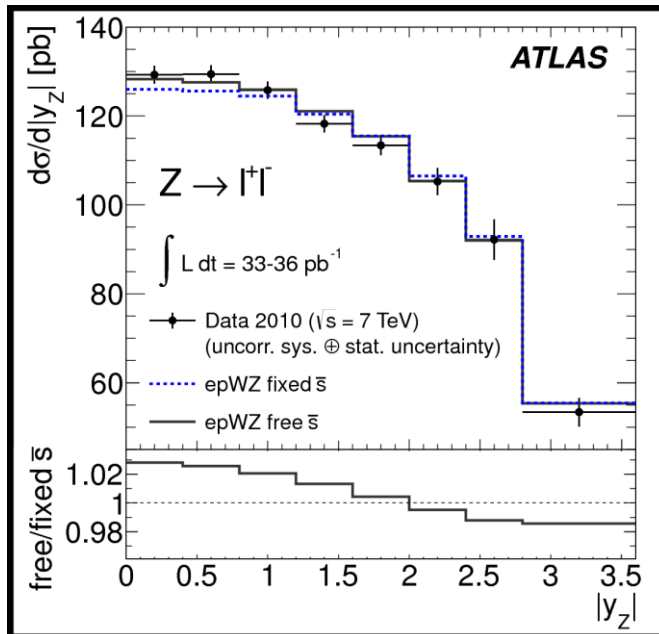
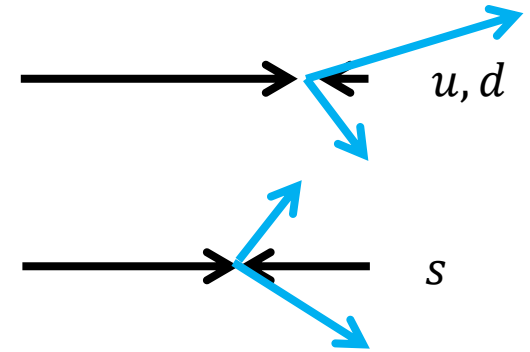


Improved description  
on very forward jets

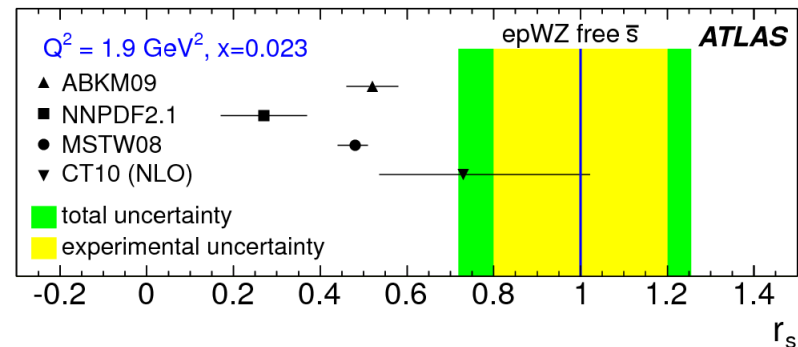
若干形が変わっている

# Strange quark from W/Z at the LHC

- No valence contribution for strange quark (perhaps)
  - No largely asymmetric configuration
  - Z production through Drell-Yan (annihilation) occurs more in central rapidity if  $s, \bar{s}(x)$  are larger



Data shows slight excess in central rapidity



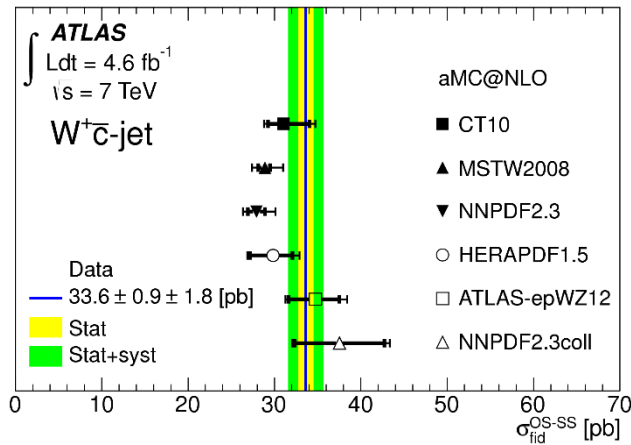
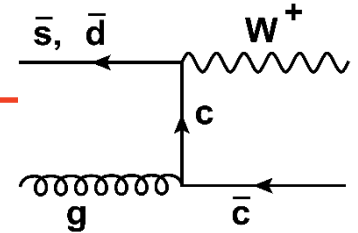
$$r_s \equiv \frac{0.5(s+\bar{s})}{\bar{d}} = 1.00 \pm 0.28 \text{ (total)}$$

Strange is not suppressed

# Strange from W+charm production

- Sensitive to strange quarks
- Slight enhancement on  $c$  over  $\bar{c}$

$$\begin{aligned}
 & s \rightarrow W^- + c \\
 & d \rightarrow W^- + c \\
 & \quad \text{(Cabbibo-suppressed)} \\
 & \bar{s} \rightarrow W^+ + \bar{c}
 \end{aligned}$$

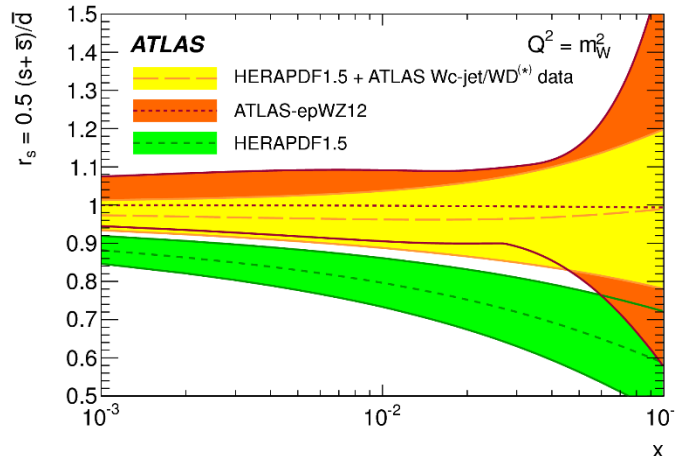
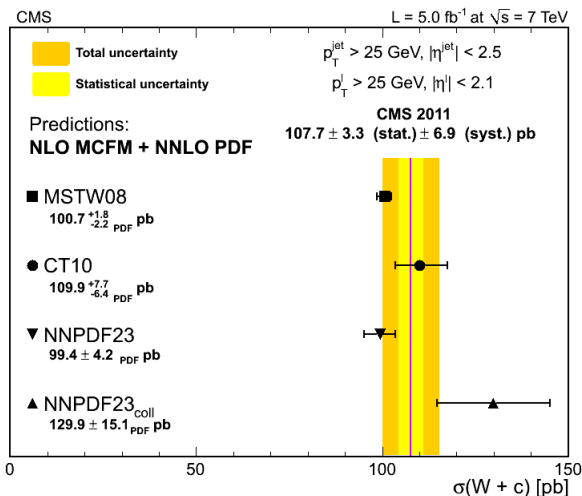


MSTW off (assuming  $\bar{s}/\bar{d} \sim 0.5$ )

CT10 ~ OK

NNPDF (collider only) overshoots

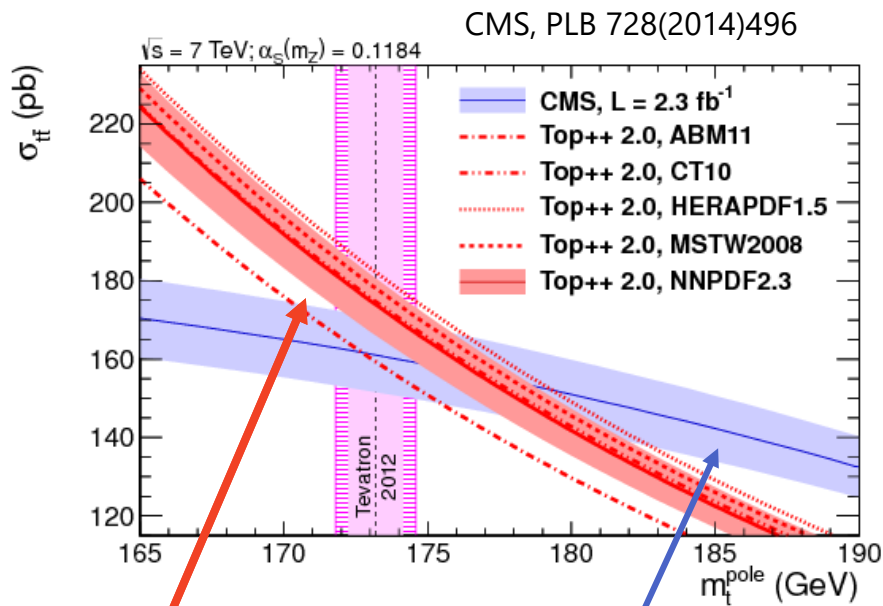
ATLAS WZ feedback: consistent!



Another evidence: strange not suppressed

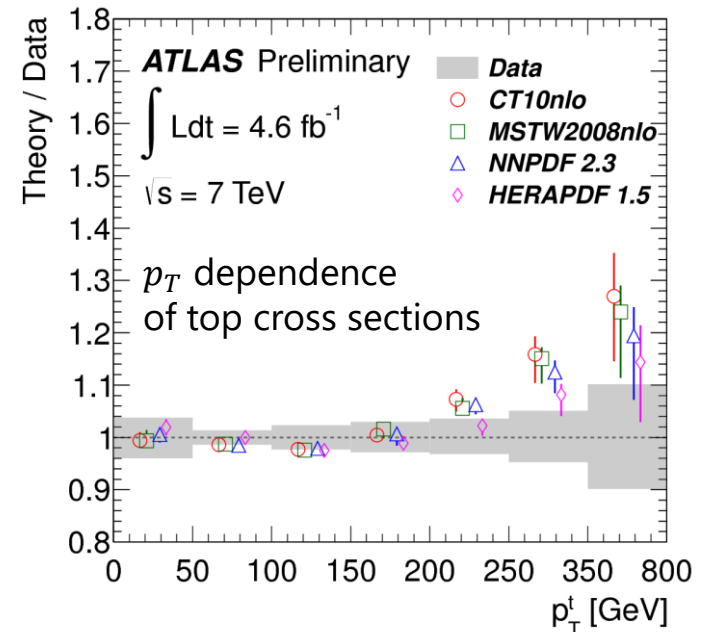
# Top quark cross section and pdf

- Top mass is hard to define (pole,  $\overline{MS}$  ...) and measure
- An idea is to fix mass (or  $\alpha_s$ ) by measuring top cross section



NNLO cross section prediction with different PDFs

Cross section depends on  $m_t$  because of kinematics change in generators used for experimental correction



Top quark prediction: some uncertainty from PDF